

Keio

Research

Center

for

the

Liberal

Arts

慶應義塾大学
教養研究センター

2022 年度
活動報告書

2022年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 片山杜秀

戦後の新制大学は、学部生の卒業に必要な単位を、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門教育科目の4科目の組み合わせによって構成するように、長く事実上、義務付けられていました。取得すべき単位数の内訳も国によって定められていたのです。そして、4科目のうち、専門教育を除く3つが教養教育科目として広く理解されてきた歴史があったのだと思います。もっとも体育の実技となると、また性質が異なるのかもしれませんが。しかし、1991年に大学設置基準が大幅に改正されました。同年にはソヴィエト連邦が崩壊し、世界の様相が激変しました。たまたまでしょうが、大学も大きな変革期を迎えたのです。科目に関する従来の大枠も廃されて、大学個々にお任せになりました。その頃には、現代文明の高度化・複雑化に伴って、大学教育の専門性を高めることが時代の要請にもなっていたと記憶します。教養教育は高校まででかなり済んでいるのではないか。大学の1・2年生にもっと専門教育をなすべきではないか。もっと直截的に言えば、教養教育は要らないのではないか、ということでしょう。こうして1990年代の日本では、大学の教養教育に幅広く北風が吹いたのであり、破壊的ともいえる極論さえ、世の中で説かれるようになりました。教養教育に携わる側は、自らの必要性を外界に対して如何に説得しうるのか、また、自己変革を推進して、おのれの存在の正当性を改めて獲得してゆけるのかどうか、際どい状況に立ち至ったのです。教養研究センターが日吉キャンパスを拠点として開所したのは2002年のことですが、それはやはり1990年代からの「脱教養教育的潮流」に対抗して、教養教育の新しい潮流を生み出すべく苦闘した先生方の思いの結晶であったかと、勝手ながら心得ています。しかも2002年には教養教育に久々の本格的な追い風が吹いていたのです。中央教育審議会は同年1月、「我が国の高等教育の将来像」と題して、文科省にこのように答申したのです。「新たに構築されるべき「教養教育」は、学生に、国際化や科学技術の進展等社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を与えるものでなければならない。各大学は、理系・文系、人文・社会・自然といった、かつての一般教育のような従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や単なる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養に努めることが期待される」。それからこういう1項もあります。「学士課程は、基本的役割として、学生の人格形成機能や生涯にわたる学習の基礎を培う機能を担っており、内容の充実した教養教育や専門教育を行うことが不可欠である。そこで、学士課程教育の充実のため、分野ごとにコア・カリキュラムが作成されることが望ましい。また、このコア・カリキュラムの実施状況は、機関別・分野別の大学評価と有機的に結び付けられることが期待」される。この文面には解釈の余地がありますが、教養教育を軽んじると大学評価に響くというふうにも読めるでしょう。教養研究センターはここで言う「コア・カリキュラム」のデザインの先導者として立ち上がった歴史的経緯があるだろうと、これまた勝手ながら理解しています。そのあとはどうなっているのでしょうか。1991年からもう32年も経っています。世の専門化・高度化は等比級数的に拡大し、大学で専門教育と言ってもそれなりの限界性があるのだと、広く認識されるようになったと思います。その分、「学生の人格形成機能や生涯にわたる学習の基礎」の部分の比重が相対的に高まらざるを得ない。教養教育が、大学の中で、もっともっと声高に行われるべき時が巡っていると考えています。

目 次

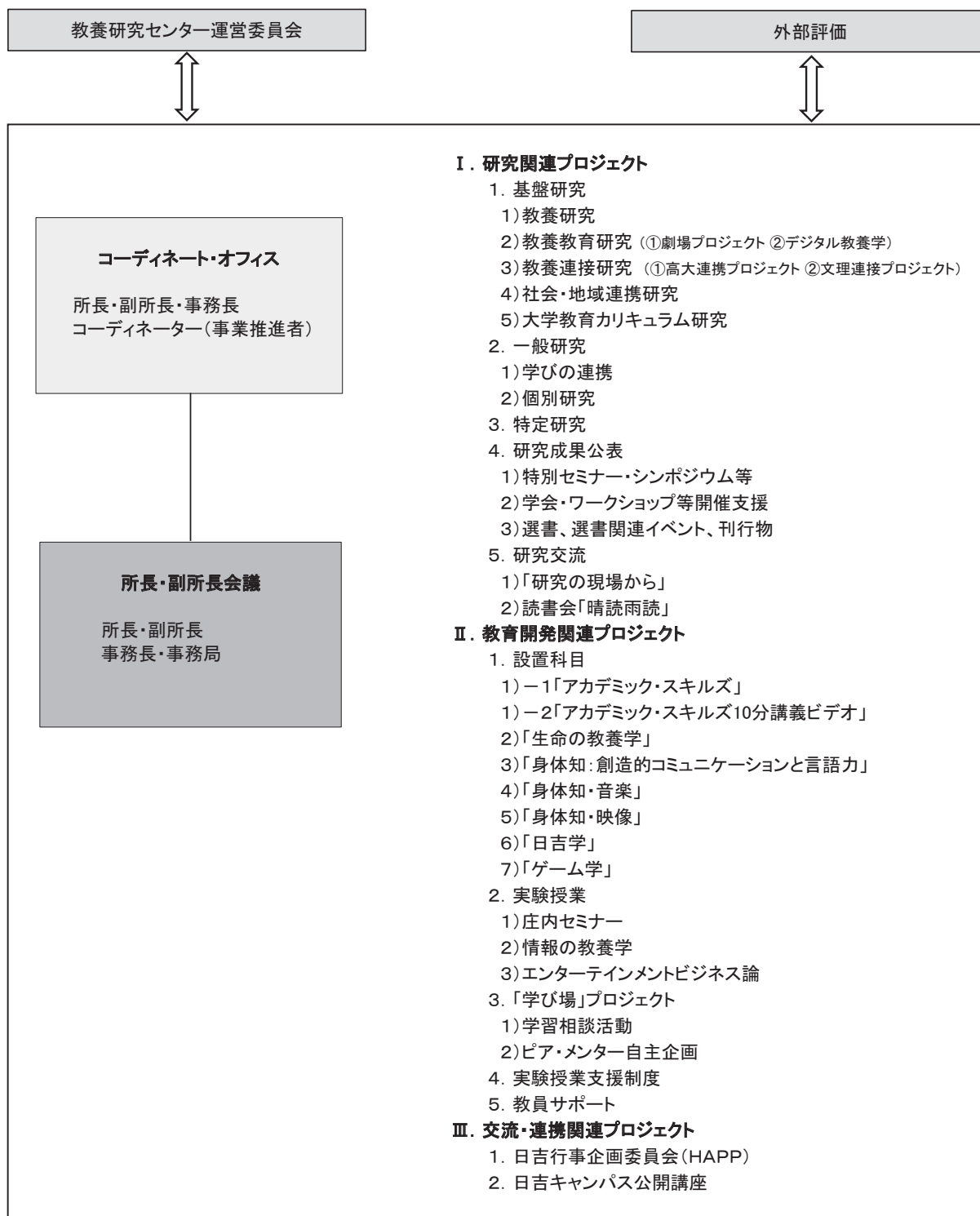
はじめに	3
組織構成と事業計画	6
2022年度事業報告	7
広報・発信	9
I 研究関連プロジェクト	
基盤研究・一般研究・特定研究	11
基盤研究	
教養研究	12
教養接続研究 高大連携プロジェクト	13
教養接続研究 文理接続プロジェクト	14
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	16
研究交流	
研究の現場から	18
読書会「晴読雨読」	19
不破有理教授最終講義	20
II 教育開発関連プロジェクト	
1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	21
1-2 生命の教養学 ―記憶	22
1-3 身体知 ―創造的コミュニケーションと言語力	23
1-4 身体知・音楽	24
1-5 日吉学	25
1-6 ゲーム学	26
2 実験授業	
2-1 庄内セミナー	27
2-2 情報の教養学	29
2-3 エンターテインメントビジネス論	30
2-4 スポーツ・インテグリティ	31
3 「学び場」プロジェクト	32
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 日吉行事企画委員会（HAPP）	34
2 日吉キャンパス公開講座	36
3 「創造力とコミュニティ」研究会	38
資料編	
1 慶應義塾大学教養研究センター規程	40

2	運営委員会委員	42
3	組織構成員	43
4	2022年度の主な活動記録	45

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。

※所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

教養研究センター組織構成と事業計画(2022年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

2022 年度 事業報告

教養研究センターの活動は、6頁の事業計画表に示される通り、Ⅰ～Ⅲという3つの柱に従って行われている。以下、2022年度の主要な諸点について概略を述べ、各項目の報告のイントロダクションとしたい。

Ⅰの研究関連プロジェクトのうち、まさに土台の部分占める基盤研究は、①「教養研究センターの根幹にある教養そのものを研究すること」と、②「教養教育の未来のありようを、従来の枠組みにとらわれずに極めて自由に接続させ、実験し実践するということ」の2本立てになっている。

①の領域では、宗教が年度のテーマとして掲げられた。教養を生き抜くための知恵や哲学と解すれば、そこに宗教が重く絡むのは明白であるとの観点ゆえである。その趣旨に沿って2回の講演会が行われ、このテーマは2023年度にも受け継がれてゆく予定となっている。②の領域では、位相の異なる、2つの接続のかたちが探究された。高大連携と文理接続である。高大連携は文字通り、高校と大学の連携である。接続と言い換えてもよい。2022年度は、高校と大学の教員が連携し、高校生も大学生も参加可能な、しかも内容において極めて刺激的な催事が1回開かれた。今後、拡充して、未来の教育のかたちを示したい。文理接続は、文系と理系とに分かれた学問教育のありさまを見直すための企てである。現代文明の複雑化に伴い、文系と理系を別々にしての高等教育が時代に対してある種の限界を呈しているともみなすことも、それほど無理ではないであろう。幸いにも日吉キャンパスは文系と理系の両方の研究者と一緒に抱えている。文と理を接続させるための研究活動を行うのに、日吉は恰好の場とも言える。その特性を活かして、教養研究センターは研究会を立ち上げている。その活動はとても活発であり、2022年度には論文集も刊行された。新しい授業を立ち上げて行く展開もあり得るであろう。継続してゆきたい。

Ⅰには、以上の基盤研究のほか、研究成果公表と研究交流が含まれる。研究成果公表は、教養研究センターの所員各々の研究活動を広めるための催事を支援する枠組みを提供するものであり、学会やワークショップ等の開催支援を行う。2022年度には2件が対象となった。研究交流とは、この場合、どうしても学部や部会の壁に仕切られがちな研究者に開

かれた交流をもたらしたいがゆえの機会の創造のことを言う。そのうち「研究の現場から」は、研究者の発表とそれに伴う対話の会であり、2022年度は2件が催された。かつては対面で行われたものだが、疫病禍以来、オンラインで開くかたちが通例化している。読書会「晴読雨読」は、研究者を中心に、参加を広く自由にして、職員にも学生にもしてもらい、回数もフレキシブルにし、むしろ特定の書籍を読み込むことを課題として設定されるもので、2022年度は1企画を連続的に催した。そして教養研究センターの元所長でもあられる、経済学部の不破有理教授の最終講義も、研究交流の枠内で開くことができた。最終講義を行う習慣が日吉キャンパス所属の教員には長年なかったと言ってよく、それは不思議でもある話であって、理工学部の小菅隼人教授が教養研究センターの所長時代に、旧弊を打破して新しい習慣を作る努力をされた。その結果、日吉における最終講義が定着しつつあるのではないだろうか。

続いてⅡの教育開発関連プロジェクトについてである。教養研究センターは学部の枠にとらわれない新しい教養教育のためのデザインをする場、授業を生み出す場、そして無事に生み出されて正規の科目となった授業を継続的に運営し、発展させる場である。教育機関としての教養研究センターの本分は、改めて言うまでもなく、このⅡの領域に多分に存すると言える。2021年度は、大口の寄付元を失ったせいで、多くの設置科目を閉じざるを得ぬ状況に陥り、開けたのは「身体知・音楽」と「日吉学」にとどまったが、2022年度は2020年度以前の規模に復すことができ、「アカデミック・スキルズ」(3クラス)、「生命の教養学」、「身体知」、「身体知・音楽」(2クラス)、「日吉学」、「ゲーム学」を、正規の授業として開講できた。うち「ゲーム学」は新規の講座であり、時代の変化に応じた、教養研究センターならではの授業としてデザインされたものである。

実験授業としては「庄内セミナー」、「情報の教養学」、「エンターテインメントビジネス論」、「スポーツ・インテグリティ」を行った。うち「エンターテインメントビジネス論」は2023年度に学生の卒業単位になるという意味での正規の授業とされる予定である。

それから「学び場」プロジェクトである。設置科

目の「アカデミック・スキルズ」の履修者を臨時職員として雇用し、日吉メディア・センターで学習相談員を務めて貰うという仕掛けだが、2021年度までは疫病禍の影響を受け、十分な活動をできなかった憾みがあった。しかし2022年度はかなり平常に復することができた。

Iの研究関連プロジェクトが教養研究センターの骨であり、IIの教育開発関連プロジェクトが同じく肉だとすれば、IIIの交流・連携関連プロジェクトは、言わば皮膚であろう。つまり外界とつながる部分である。IIIを構成するのは、①日吉行事企画委員

会（HAPP）による一連の催事、②日吉キャンパス公開講座、③「創造力とコミュニティ」研究会となる。①は主に塾内に向けての、②は主に塾外に向けての催事であり、③はそういう企てを効果的にまします外部に向かって開いていくための研究会である。

I、II、IIIが有機的に連接しての発展が、教養研究センターのみならず慶應義塾全体の未来に寄与するものと固く信じ居る次第である。

（片山杜秀）

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。

1. アカデミック・スキルズ

■『2022年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』

2023年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を完成させる。これを編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。

2. 教養研究センター選書

■不破有理『教養研究センター選書 23 「アーサー王物語」に憑かれた人々——19世紀英国の印刷出版文化と読者』

2023年4月28日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2022年度は1作が刊行された。

3. 「生命の教養学」

■『2022年度「生命の教養学」講義記録』

2023年3月31日刊行

オムニバス形式で行われるセンター設置科目「生命の教養学」の講義内容の記録。2022年度のテーマは「記憶」で、11名の講師による講義の紹介である。



佐藤元状

4. 報告書

■『2022年度第11回「庄内セミナー」報告書』

2022年11月30日刊行

■『教養研究センター2021年度活動報告書』

2022年8月31日刊行

5. 教養研究センターパンフレット

■2022年10月1日刊行

センターを総合的に紹介するパンフレットのアップデート版。

6. Newsletter (ニューズレター)

■第40号 2022年5月16日刊行

■第41号 2022年11月30日刊行

教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

7. アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ

「アカデミック・スキルズ」のエッセンスを誰でも手軽に学べるよう、今年度も新たに4本の動画を制作し、ウェブサイトで公開した。

サイトURL：<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies>

「科学史」 見上公一（理工学部准教授）

「サブカルチャー研究」

新島 進（経済学部教授）

「映画は読むことができるのか？」

佐藤元状（法学部教授）

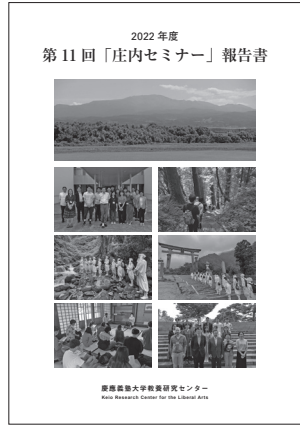
「ロシア語について」 越野 剛（文学部准教授）

（高橋宣也）



新島 進

2022年度教養研究センター
刊行物一覧



2022年度
第11回「庄内セミナー」報告書
(2022.11.30 刊行)



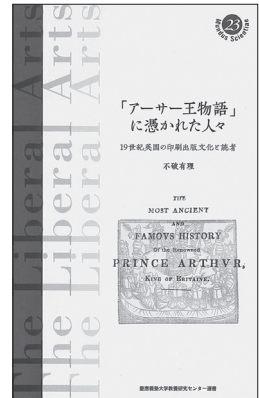
慶應義塾大学教養研究センター
(2022.10.1 刊行)



教養教育センター設置科目
「生命の教養学」
2022年度 講義記録集
(2023.3.31 刊行)



アカデミック・スキルズ2022
学生論文集
(2023.3.31 刊行)



教養研究センター選書
(2023.4.28 刊行)



2021年度活動報告書
(2022.8.31 刊行)



Newsletter40号
(2022.5.16 刊行)



Newsletter41号
(2022.11.30 刊行)

基盤研究・一般研究・ 特定研究

■基盤研究

大学の教育を教養教育と専門教育に分けるとすれば、教養研究センターは、日吉キャンパスに設置されていることから推察される通り、教養教育を研究するセンターとしての性格を強くもって誕生したとも言える。本報告書をみれば、設置科目や実験授業や「学び場プロジェクト」についての報告がそれなりの比重を占めている。時代に適応した教養教育を、学部の壁を越えて行うミッションが、教養研究センターに課されている証拠である。しかし、教養教育の前提は教養の意味を確認することにあり、教養とはいつの時代にも自明というわけではない。それは時勢によって移り変わる面がある。したがって、教養研究センターは教養教育のための科目を具体的に創造し実践するのみならず、センターの字義通り、教養そのものに深入りし、研究せねばならない。その成果をもちろん教養教育のデザインに還元せねばならない。そうした趣旨にもとづき行われ、2022年度も着々と遂行されたのが、ここで言う基盤研究であろう。

基盤研究は、現在のところ、3部門に分かれている。1番目は、教養概念の理解を深め、あるいは更新するための講演会やシンポジウムである。2番目は、日吉キャンパスが大学のみならず慶應義塾高校を含みこんでいることの地の利も活かしての、高校と大学の連携である。一貫教育が大きな前提とされている義塾において、高校生と大学生とが同一平面上で刺激を受ける機会があるのは当然であり、そのための回路作りが模索されねばならず、そうした作業から教養の概念も更新されてゆくであろう。この2番目は、たとえば高校生のうちに大学生時の単位の一部を取得するというような、現時点では荒唐無稽なのかもしれないが、未来においてはありうるのではないかとも想像される事柄にアプローチする部分がなくもないと、あくまで個人的意見ではあるが考えている。3番目は文系と理系の橋渡しである。

文系と理系の区別は、専門に分化する第一歩として設定されるものであろう。数学、物理学等を本格的に学ぶとなれば、要する時間は膨大で、大学が既に文系と理系の学部に分かれているのだから、どちらを選択し積極的に学習してゆくのかは大学受験時・入学時には定まっていなければならない。高校教育の内に専門への分化が起きなくては入試にも対応できない。ところが、教養が専門に先立つものだとすれば、それは文系と理系を包括する知でなければならない。つまり、文系と理系とに分かれた後に、互いに互いの芝生が見えなくなるとは教養人ではない。この当たり前が等閑視されているところに、高度化する現代文明の全体像が現代人にひたすら見えにくくなって、教養人が死滅してゆく現代の悲劇の根源がある。文理をつなげることが現代に喫緊の課題であり、その意味で、この3番目の領域はとてつもなく重要である。たとえば、科学史や科学論、技術史や技術論と、哲学や経済学や社会学や政治学とが、有機的に交わる科目が多くなるとは、大学における教養教育の今日の実は得られぬのではあるまいか。

基盤研究は、危機的時代に対応するための、教養研究センターの重要なミッションであると心得ている。

■一般研究

例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室（204室・205室）を研究オフィスとして提供した。プロジェクト研究員室（202室）については申請がなかった。

■特定研究

2022年度においては特記すべき活動はなかった。
(片山杜秀)

2022年度・プロジェクト研究室（204室・205室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
小原 京子・理工学部教授	意味フレームに基づく言語資源の改良と他の言語資源とのリンク
津田 真弓・経済学部教授	デジタル化時代の古典文学・書誌学の研究と教育
阿久澤 武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用

I 研究関連プロジェクト

基盤研究 教養連接研究 高大連携プロジェクト

教養研究センターにおける高大連携は主に慶應義塾高校との間で行われており、教員間の交流、高校生と大学生が共に学ぶ空間作りが、庄内セミナー、日吉学、高大連携プロジェクト、HAPP 主催による日吉協育ホールでの公演において展開されている。ここでは、日吉協育ホールにおける HAPP 公演について報告し、他の項目についてはそれぞれのセクションを参照されたい。

2022 年度は、教養研究センター日吉行事企画委員会主催、アート・センター協力によって、10月21日（金）15：15～17：30、新入生歓迎行事「吉増剛造×大友良英 Voix/Voie 詩と音楽の交差するところ2」として行われた。出演：吉増剛造・大友良英、映像演出・記録：鈴木余位、コーディネーター：古川晴彦（所員・高等学校教諭）である。当日は、小菅隼人（前所長・理工学部教授）と阿久澤武史（所員・高等学校長）の挨拶によって開始した。以下、古川晴彦による HAPP への報告をもとに、内容を紹介する。

慶應義塾出身で、現在の詩壇の最高峰である吉増剛造氏は、大友良英氏とのコラボレーションとして、150名の参加者（うち高校生100名）を得て、たいへん刺激的なパフォーマンスを行った。吉増氏が石巻で実践したガラスに文字を刻印する創作行為を、10代を福島で過ごした大友良英氏の音とともに、南三陸の木材を用い3.11の記憶を襲にもつ日吉協育ホールで行った意義は大きい。教養研究センターと慶應義塾高等学校は、共同して「教養の一貫教育」を立ち上げたが、吉増剛造氏は、さまざまな制約のある不自由の中で、次第に自由に空間が拡張していくつもの皮膜（ブルーシート、ガラス、布、多重映像を通じて）を可視化させた。ホールの南三陸



志津川の森の無数の眼に取り囲まれて、床面いっばいに散り敷いた10m×10mのブルーシートがまるで3.11の津波や海のようにもみえたという感想もあった。そこで、大友良英氏は波の音をサラサラと鳴らし、吉増剛造氏は大川小学校4年生の鈴木巴那さんの赤いランドセルについて、あるいは本年亡くなったフランスの詩人ミシェル・ドゥギーのアタッシュマンについて、この日のために作られた自らの最新詩を朗読し、また吉本隆明の日時計篇を筆写した原稿に主に赤（ランドセル、ボードレールの赤）と青（波、海）のインクを垂らした。

声と音の通路の切り結び。「/」のズレ、段差、切断。杉の柔らかなみずみずしさの立ちあがる東北の記憶に寄り添うホールで3.11を経た杉の水脈を辿って、東日本大震災の記憶と真摯に向き合ってきた吉増剛造氏が、同じく東北とさまざまな活動を通して向き合ってきた大友良英氏の音楽と互いに切り結んだ時間であった。会場の高校生、大学生にとっては大変刺激的な体験となり、質疑応答では驚くほど鋭い質問が活発に交わされ、終了時刻を迎えるのが惜しい気持ちになったほど充実した公演であった。

（小菅隼人）

I 研究関連プロジェクト

基盤研究

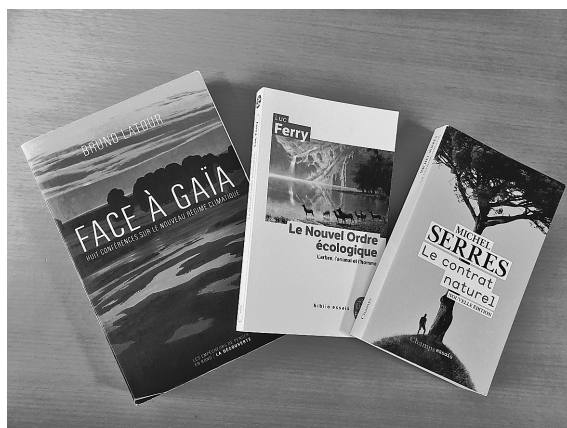
教養連接研究

文理連接プロジェクト

2022年度の「文理連接プロジェクト」は、前年度に続いて、「文理連接研究会」という形で実行された。新型コロナウイルス感染症の影響で予定より半年遅れで2020年度秋学期に開始したこの研究会は、一年半にわたり「感染」という共通テーマで月に一回の研究会を重ねてきた。2022年度は、共通テーマを「エコロジー」に変更した上で、年度末に論考集を作成することを前提に、それに向けて参加メンバーのうちの希望者が、論考の計画発表、中間発表、最終発表などを行う形で進められた。「感染」から「エコロジー」へと緩やかに連続する形で共通テーマを改めた上で、一年を掛けて各自が論考を準備するという、これまでよりも深く長い「接続」が試みられた。

2022年度の文理連接研究会の企画メンバーは、五十音順に荒金直人（理工学部／哲学・科学論）、井奥洪二（経済学部／環境科学・医工学）、小菅隼人（理工学部／英文学・演劇学）、寺沢和洋（医学部／放射線物理学・検出器物理学）、見上公一（理工学部／科学技術社会論）、宮本万里（商学部／政治人類学・南アジア地域研究）の6名である。この6名が中心となって、新たな形での「接続」を試みるために、計10回の研究会が行われた。

以下が2022年度に行われた10回の研究会の概要である。【第1回】2022/04/29 (Zoom) 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(1)：井奥洪二、見上公一、荒金直人、宮本万里。【第2回】2022/05/27 (Zoom) 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(2)：縣由衣子（文学部／フランス現代思想）、小菅隼人、高山緑（理工学部／心理学・老年学）、寺沢和洋。【第3回】2022/07/01 (Zoom) 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(3)、これまでのまとめと議論、「エコロジー」の定義について：荒金直人。【第4回】2022/07/29 (Zoom) 中間発表と議論(1)：荒金直人「フェリーとラトゥールによる『自然契約』の解釈の違いについて」、見上公一「人新世と気象工学」、宮本万里「環境人類学の視点から自然と文化の境界を再考する」。【第5回】2022/09/30 (対面) 中間発表と議論(2)：寺沢和洋「コロナ禍と宇宙生活下のエコロジー」、小菅隼人「〈自然〉の中の人間、人間の中の〈自然〉：『リア王』を中心に」、井奥洪二「文理連接の観点から論じるエコロジー／環境保全・創成のための科学技術」、縣由衣子



「他者としての自然と第三者としての自然／ミシェル・セールの『自然契約』をめぐる」。【第6回】2022/10/28 (Zoom) 「自然」という概念について：荒金直人、井奥洪二。【第7回】2022/11/25 (Zoom) 中間発表と議論(3)：高山緑「心理学におけるエコロジー、超高齢社会におけるエコロジー」。発表(1)荒金直人「エコロジーと近代性／フェリーとラトゥールの見解の違いを手掛かりに」。【第8回】2023/01/06 (Zoom) 発表(2)：寺沢和洋「宇宙環境と生活圏のエコロジー ～宇宙放射線被曝を中心に～」、宮本万里「ブータン、ポプジカ谷の自然保護政策と人・神・獣関係の変容」。【第9回】2023/02/03 (Zoom) 発表(3)：縣由衣子「ミシェル・セールの『自由契約』における自然概念とエコロジー」、見上公一「対立する双子？：気候工学と環境人文学」。【第10回】2023/03/13 (対面) 発表(4)：小菅隼人「〈自然〉の中の人間、人間の中の〈自然〉：『リア王』の空間意識——試論」、寺沢和洋「宇宙環境と生活圏のエコロジー ～宇宙放射線被曝を中心に～」（2回目）。今年度の総括と今後の方向性についての議論。

以上の10回の研究会での発表と議論を通じて、最終的に今回は6名が論考を完成させ、文理連接研究会論考集『接続』1号（2023年4月発行）に収録

することになった。

2019年度に開始した「文理接続プロジェクト」は、初年度は6回の連続講演、2020年度と2021年度は共通テーマに基づいた月に1回程度の研究会（話題提供と議論）という形を採り、基本的には各回完結型のものであった。これに対して2022年度は、年度末の論考作成に向けて各自が考察を深めるという形を採ったため、各回では完結しない流れが生まれ、より深みのある連携が取れたのではないかと思う。しかしまた、そのことが同時に、文理接続の難しさを浮き彫りにした部分もある。例えば、このような研究会での論考に相応しい文体とは何かという問題である。他分野の研究者を容易に近づけない高度に専門的な文体ではうまく行かないが、だからと言って内容の専門性を大きく落とすことは避けたい。このような葛藤は、特に理系寄りの研究者には大きな重圧になる。

このプロジェクトが目指しているのは、一つの目的に向かって分業的に連携するような共同研究とは異なる、文理を跨ぐ新たな形での「接続」である。つまり、各自がそれぞれの専門分野に留まり、独自の問題意識に基づいて考察する際に、他分野で展開される考察に積極的に関心を持ち、そこから刺激を受け、間接的にであれ相互に影響を与え合うような繋がりを目指している。そして、そのような繋がりが可能になるための具体的な接続の形を模索している。論考集の作成が、この繋がりを支える一つの装置となることが期待される。

2023年度も引き続き「エコロジー」という共通テーマの下で、同様の研究会を継続し、年度末に論考集を作成する予定である。特に理系の参加者が増えることを期待しつつ、より良い「接続」の場を作り上げていきたい。

(荒金直人)

研究成果公表 学会・ワークショップ等 開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促進することを趣旨としており、2022年度は春学期・秋学期各1件の申請が採択された。

(片山杜秀)

Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle

まずは教養研究センターの物質面および精神面での多大なサポートを受けて、コロナ禍にもかかわらず、ハイフレックス方式で、シンポジウムを開催できたことを心から感謝したい。本シンポジウム *Drive My Car: A Symposium on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle* は2022年6月18日に日吉キャンパスのシンポジウムスペースで開催された国際シンポジウムであるが、オンラインの参加者を含めると200名以上の来客に恵まれた、実り多いイベントだった。

濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』（2021年）は、多国籍的なキャストと多言語的な空間をドラマの中心に据えたダイナミックな映画作品である。本シンポジウムの登壇者も映画に負けないような多様性を意識したキャスティングにした。二つの基調講演に加えて、七つの研究発表が行われたが、日本、香港、台湾、韓国、アメリカと、登壇者のバックグラウンドは多岐にわたるものであり、同じ作品に対する解釈の仕方も、グローバル化の時代にふさわしい、多元的なものであった。

本シンポジウムの内容に、三つのインタビューを加えたものを、2023年4月に『「ドライブ・マイ・カー」論』（慶應義塾大学出版会）として出版した。英語で国際的なシンポジウムを行い、その内容を日本語で出版し、日本のオーディエンスに幅広く開いていき、その成果を問う。こうした自由な言語的運動こそ、現在の教養の一つの理想なのではないか、とそんなことを考えている。

(佐藤元状)



Drive My Car

A Symposium on Hamaguchi's Cross-Media Vehicle

Symposium Space, Raiosha, Hiyoshi Campus, Keio University (and via Zoom)

18 June 2022

10:00-11:00
Welcome: Motonori Sato
Keynote One: D. A. Miller (The University of California, Berkeley)
'Drive My Car Drives Me Crazy'

11:00-12:30
Panel One: Voices from Asia
Ru Shou Robert Chen (National Chengchi University, Taiwan)
'A Return to Bazin: Uncle Vanya in Drive My Car'

Hwang Kyunmin (Meiji Gakuin Institute of Language and Culture, Japan)
'Beyond Borderlines: On Hamaguchi Ryusuke's Drive My Car'

Mary Shuk-han Wong (Lingnan University, Hong Kong)
'Sadness in Drive My Car'

13:30-14:30
Keynote Two: Ayako Saito (Meiji Gakuin University, Japan)
'Who Drives His Narrative: Women, Psychoanalysis, and Cartography in Drive My Car'

14:30-16:30
Panel Two: Voices from Japan
Kosuke Fujiki (Okayama University of Science, Japan)
'Hear the Other Sing: The Construction and Acceptance of Otherness in Drive My Car'

Hironori Itoh (Kansai University, Japan)
'All the World's a Stage, Rotating with Sound: Motives of Rotation and Sound in Drive My Car'

Motonori Sato (Keio University, Japan)
'To the Ends of Adaptation: The Beginnings of Translation in Hamaguchi's Asako I & II and Drive My Car'

Ryohei Tomizuka (Kanagawa University, Japan)
'Looking and Touching: Bodies in Drive My Car'

16:30-16:45 Closing: Ryohei Tomizuka

Organised by REM (Ryohei Tomizuka, Eiji Okuda, Motonori Sato)

With the Assistance of Keio Research Center for the Liberal Arts, Mita Bungaku, Keio University Press

Contact: Motonori Sato (motsato@a7.keio.jp)

Booking essential: <https://forms.gle/IDJQQLU8Ltnjm389>



横浜〔出前〕美術館—港北区編—

2022年10月29日（土）14:00～15:30、日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペースにて、上記イベントを開催した。

「横浜〔出前〕美術館」は、横浜美術館の大規模改修に伴う休館期間に、学芸員やエドゥケーターが横浜市内各地をめぐって講演やワークショップを行う、同館主催のイベントである。塾生が美術館職員から直接レクチャーを受けられるという塾内のメリットに加え、日吉キャンパスの地域貢献にも大いに資する企画であるため、学会・ワークショップ等開催支援制度によって、教養研究センターの後援というかたちで「港北区編」を開催することになった。

内容については、横浜美術館の担当者と申請者（安藤）が協議し、横浜美術館主任学芸員の木村絵理子氏による「ミュージアム・コレクションの未来」と題する講演に決定した。また、学芸員という職業に関心をもつ学生が多いことに鑑み、作品の個別解説だけでなく、コレクションの形成過程という美術館業務の裏側についても触れていただくことになった。

講演では、横浜美術館が収蔵する現代美術作品のなかから2点を取り上げ、それぞれのコンセプトや制作の背景について、作者の生い立ちや活動の軌跡を踏まえて分かりやすく解説いただいた。加えて、それらが横浜美術館のどのような活動・取り組みのなかで制作あるいは収集されるに至ったのかをお話しいただき、最後は、気候変動などの世界規模の問題が拡大しつつある現代において、アーティストや作品、そして美術館がいかなる存在意義・役割を持



横浜美術館
YOKOHAMA MUSEUM OF ART

横浜
出前
美術館

学芸員によるレクチャー
ミュージアム・コレクションの未来

日時 2022年10月29日(土)
14:00~15:30 (開講 13:30) 会場 慶應義塾大学 日吉キャンパス
来往舎
1階シンポジウムスペース

講師 木村 絵理子 (横浜美術館 主任学芸員)

主催: 横浜美術館 後援: 慶應義塾大学 教養研究センター

ち得るかという問題提起で締めくくられた。

参加者は65名。塾生をはじめ参加者の関心は高く、講演後には活発な質疑応答が行われた。なお、本イベントの概要については、横浜美術館のホームページで公開されている。<https://yokohama-art-museum.note.jp/n/n780899d871b4>

(安藤広道)

I. 研究関連プロジェクト

研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、参加者による議論も活発に行われる。

2022年度は春学期に1回、秋学期に1回、Zoomによるオンライン形式で開催された。

■第1回 2022年6月29日（通算第34回）

講師：永嶋 友（法学部）

「第二次世界大戦前・中・後のBBCラジオ放送——リスナーの参加の観点から」

永嶋先生は、2022年がBBC誕生100周年にあたることに触れながら、イギリス現地のBBC文書保管庫などの直接の調査を踏まえて、1920年代、30年度には実験的なラジオ劇などが制作され、リスナーの参加が当初から重視されてきたことを示された。そして戦時中のプロパガンダ放送を経て、戦後はモダニズムを反映したラジオ劇が多く放送され、放送の傾向が時代の潮流と不可分であることが浮かび上がった。参加者からは世界の他地域での放送状況についてのコメント提供もあり、現代におけるラジオの重要性を再確認させる、興味深い研究領域であることが実感された。


■第2回 2022年12月14日（通算第35回）

講師：越野 剛（文学部）

「オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』と革命の世界文学：ヨーロッパ・ソ連・中国」

越野先生は、ソ連時代の小説家ニコライ・オストロフスキーの『鋼鉄はいかに鍛えられたか』（1932-34年）を紹介された。この作品は社会主義国家建築に打ち込む一人の若者の成長を描いて、社会主義リアリズムの模範的作品として称揚され、日本を含む多くの言語に翻訳されていわゆる西側でも広まった。主人公の激しい鍛錬ぶりは一時期の読者を熱狂させたが、ソ連解体後はブームは去った。しかし中国では人気を維持していて1999年にはテレビドラマ化までされている。その一因には、本来否定的人物像だった女性とのロマンス模様で現代の若者が惹きつけられたという皮肉があったという。人気を博しながら忘れられ、しかし想定外の形で命脈を保つ文学の受容の変転に思いを致すお話だった。

（高橋宣也）




**研究の現場から
Zoom開催！**


「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野や関心事を紹介し、和やかな雰囲気でお話する会です。学部や分野を越えての交流も深められます。

第三十四弾 6月29日（水）18:15～20:00 Zoom開催
永嶋 友（法学部 専任講師）
「第二次世界大戦前・中・後のBBCラジオ放送——リスナーの参加の観点から」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。
★お申し込みは、高橋宣也（文） nobuya@keio.jpまで事前にご連絡ください。



主催：教養研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp




**研究の現場から
Zoom開催！**

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野や関心事を紹介し、和やかな雰囲気でお話する会です。学部や分野を越えての交流も深められます。

第三十五弾 12月14日（水）18:15～20:00 Zoom開催
越野 剛（文学部 准教授）
オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』と革命の世界文学：ヨーロッパ・ソ連・中国

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。
★お申し込みは、高橋宣也（文） nobuya@keio.jpまで事前にご連絡ください。



主催：教養研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

I. 研究関連プロジェクト

研究交流
読書会「晴読雨読」

「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹」

2023年5月10日、村上春樹の初期作品に迫る読書会第6回を開催した。これは2022年から始めたシリーズの続きで、最終回となる第6回では、村上春樹の1988年の小説『ダンス・ダンス・ダンス』を取り上げた。このシリーズでは、村上春樹の小説に与えた伝記的、文学的影響について見てきたが、特にアメリカや日本の複数の作家が村上に与えた影響に注目してきた。『ダンス・ダンス・ダンス』については、レイモンド・チャンドラーが村上春樹の小説に与えた影響と、この小説が村上春樹の初期の小説に見られる治療的なテーマを継承していることについて、改めて考察した。この1年の間、学生たちと交流し、村上春樹の小説についての質問や感想を聞くことができたのはとても楽しかった。文学を読むことが楽しいのであれば、他の人と一緒に文学について話すことは、その楽しみをさらに深め、読んだ物語について新たな洞察を得るための方法である。私は村上春樹についての考えを深めることができたことに感謝し、読書会に参加した学生たちが文学への関心を深めてくれることを願っている。

(ジョナサン・ディル)

読書会実施一覧

開催日時	課題図書
① 2022/ 4/20 (水) 15:00～	風の歌を聴け
② 2022/ 5/31 (火) 15:00～	1973年のピンボール
③ 2022/ 7/ 5 (火) 14:45～	羊をめぐる冒険
④ 2022/11/ 1 (火) 14:45～	世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド
⑤ 2023/ 1/17 (火) 14:45～	ノルウェイの森
⑥ 2023/ 5/10 (水) 14:45～	ダンス・ダンス・ダンス

2023年度
教養研究センター主催
読書会 晴読雨読⑥

**アメリカ文学の中の村上春樹、
日本文学の中の村上春樹**

小説家、村上春樹の作品を取り上げ、アメリカ文学と、日本文学が村上に与えた影響について考察します。日本文化のグローバル化、グローバルな時代における作家が受ける影響を考えながら、日本人作家として、またグローバル作家としての村上春樹を評価したいと思っています。是非、ご参加ください。
(この企画は2022年度から開催されていますが、初めての方も参加可能です。今年が最終回となります。)

課題図書：
『ダンス・ダンス・ダンス』

日時：2023年5月10日(水) 14時45分～
案内人：ジョナサン・ディル
【理工学部准教授】

受付：<https://bit.ly/4042DmP>
■要 keio.jp 認証■
★読書会は日本語で開催します★
場所：オンライン (ZOOM) / 対象：塾生・慶應義塾教職員

お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

2022年度
教養研究センター主催
読書会 晴読雨読①

**アメリカ文学の中の村上春樹、
日本文学の中の村上春樹**

小説家、村上春樹の最初の8作を取り上げ、アメリカ文学と日本文学が村上に与えた影響について考察します。日本文化のグローバル化、グローバルな時代における作家が受ける影響を考えながら、日本人作家として、またグローバル作家としての村上春樹を評価したいと思っています。是非、ご参加ください。

課題図書：『風の歌を聴け』

日時：2022年4月20日(水) 15時～

案内人：ジョナサン・ディル
【理工学部准教授】

場所：来住舎2階 中会議室 対象：塾生・慶應義塾教職員

受付：<https://forms.gle/RGY9nsrtne5kjJ7R6> 定員：10名
★読書会は日本語で開催します★
対面開催を予定しておりますが、新型コロナウイルス感染状況によりオンライン開催に変更となる可能性があります。

お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

I. 研究関連プロジェクト

研究交流

不破有理教授最終講義

2023年2月8日、経済学部の不破有理教授の最終講義が教養研究センター主催で開催された。不破先生は、日吉の教養研究センター副所長を2年間（2008年～2010年）、所長を4年間（2010年～2014年）お務めになり、在任中に、「日吉学」など学術領域を横断する先駆的な試みを立案・企画運営され、「スタディ・スキルズ」（アカデミック・スキルズに改称）やアーサー王ワークショップ等、義塾の研究と教育実践の融合に多大なる貢献をされた。最終講義の会場である来往舎シンポジウムスペースには、全学部から不破先生を慕う教職員および学生が約100名集まり、オンラインでも170名を超える方々が視聴された。

『『アーサー王伝説に魅せられて』～研究と教育と～』と題するご講義は、先生のアーサー王との出会いを起点に、テキストを通してのアーサー王伝承の受容、更にはアーサー王文学におけるモードレッドの話へと展開した。モードレッドやアーサー王像が時代と共に変わり、如何にして日本で受容され、サブカルチャー界に君臨したかが示された。国、時代、ジェンダー、ジャンルを超えて変容し続けるアーサー王伝承の奥深さと未知なる可能性を感じさせる内容であった。不破先生は、教育・研究において、桂冠詩人であるアルフレッド・テニソンの「シャーロットの女」という作品と深い関わりをお持ちであった。「シャーロットの女」を素材にした教育活動の一面を垣間見るかのように、不破先生は作品を朗読しながら、文字で描かれていることを可視化し、言葉とイメージを結びつけ、それに絵画と組み合わせることによって、作品の理解を深めていった。また、不破先生は、日本初のアーサー王物語である夏目漱石の「薙露行」と「シャーロットの女」の関係性についても言及された。「薙露行」というタイトルの語義の再検討とテニソンの「シャーロットの女」の分析から看守できる、漱石が「薙露行」に込めた意図を解説してみせた。不破先生は、慶應義塾での「アーサー王講義」および少人数セミナーで「シャーロットの女」の精読を続けてこられ、この作品は、教養研究センターにおける大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」のワークショップにもなり、非常に人気を博したことは皆様の記憶にも新しい。最終講義で



<教養研究センター主催> 不破有理教授 最終講義

『アーサー王伝説に魅せられて』 ～研究と教育と～



不破有理教授は、テキストを通してのアーサー王の伝承と受容をご専門とされています。40年という長きにわたって学術領域を超えて教員と学生の連携を図り、研究と教育実践の融合に多大なるご尽力をなさいました。この度、ご退職に際して、不破先生のご貢献に感謝し、最終講義を実施いたします。発起人：柏崎千佳子、鈴木亮子、追桂、徳永聡子、永井容子（代表）

日時：2023年2月8日（水）
14時～15時45分（予定）

①対面参加（先着順・100名）
会場：日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース

対象：塾生・慶應義塾教職員
<申込み> <https://forms.gle/GYHftvn7Cwvz7hHA>
（要 keio.jp 認証）

②オンライン参加（ZOOMウェビナー）
対象：どなたでも
<申込み> <https://forms.gle/wGRkxy2kYR7VF936>

お問い合わせ：tolawasa-lib@addst.keio.ac.jp
慶應義塾大学教養研究センター



経済学部
不破有理教授
アーサー王の期
『Excalibur』の前に
(2022年近影)

ケンブリッジ留学中にアーサー王物語に出会って以来、アーサー王研究へ。さらにウェールズ留学を機に、英文学にウェールズと「裏切り者」モードレッドの視点を加えアーサー王研究に取り組む。またトマス・マロリーの『アーサー王の死』のテキスト出版がどのようにアーサー王物語の受容に寄与したか、印刷・編集・出版に関わった声なき人々の史料を発掘、編集発表中。国際アーサー王学会日本支部会長・副会長歴任。

は、時間・空間・学問領域が交錯する展開を不破先生自ら楽しむかのように、アーサー王伝説の魅力余すところなく語られた。講義終盤には、会場とオンラインを結んでの、活発な質疑応答が行われた。その他にも会場では、アーサー王の本のミニ展示エリアや来場者が好きなことを書き込める「落書きコーナー」などが設けられ、参加者が「アーサー王伝説」を基に自由闊達な知的交流ができるような工夫がなされた。和やかな雰囲気の中にも知的好奇心を刺激する新たな着眼点が見られ、参加者の想像力を大いに掻き立てる「場」が繰り広げられた。

（永井容子）

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

「アカデミック・スキルズ」は教養研究センターの設置科目としては「老舗」であり、長年、中核的な科目として位置づけられてきた。毎年、幾つかのクラスを、春学期と秋学期の両方を履修してくれる学生を募り、少人数に絞って開講し、担当教員は1クラスあたり必ず複数とする（3人を目安とし、少なくとも2人、多ければ4人）。そのような態勢で、論文の書き方、プレゼンテーションの仕方、資料の集め方等、授業のタイトル通り、アカデミックなスキルを学ぶ。学部の垣根にとらわれない、いかにも教養研究センターらしい授業である。しかも、日本の大学教育において大学生に相応しい「学び方」を教えることが等閑視されてきたまま21世紀に及んだ歴史を顧みるとき、「アカデミック・スキルズ」は状況に風穴をあけた先駆的授業として、大きな役割を果たしてきたと自負するところもある。他大学の同趣向の授業のデザインにも影響を与えてきている。

しかし、そのような歩みもいささか中断されることになった。2020年度は疫病禍により、全3クラスを秋学期のみの開講とせざるを得なくなり、2021年度はというと、教養研究センターの設置科目は原則として寄付元を持ち、その資金によって運営されることが求めているのだが、肝腎の寄付元を諸般の事情で欠き、その結果、年間を通じて開講せぬことになった。2022年度はどうであったか。復活にこぎつけた。新規の寄付元の獲得には至らなかったものの、塾当局の合意を得、全3クラスを春学期と秋学期を通して開講でき、3年ぶりに従来の状況に復することができた。

だが、新たな困難に突き当たったことも記しておかねばならない。 Semester制が大学に導入されてから既に歳月を経ているが、それを徹底するために、学生の履修申告も、春学期と秋学期のそれぞれの劈頭に別々に行われるようになった。それ以前の、春学期に秋学期の履修申告もしていたかたちだと、通年履修に誘導しやすいうちもあったのだが、その手が通用しなくなった。学生にも春と秋には同じ曜日時限でも別々の授業を取りたいという意欲が強まったように思われる。「アカデミック・スキルズ」に1年間、履修者を引き留める困難が、率直な言い方をすれば増した。授業の性質上、秋学期には履修者が減るのが「アカデミック・スキルズ」

2022年度教養研究センター設置科目

Academic skills

アカデミック・スキルズ

Presentation


プレゼンテーション

Competition

コンペティション

2月9日（木）13:00～17:00（予定）

日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース
発表者：2022年度「アカデミック・スキルズ」クラスI・II代表者



学生が一年間培ってきた「知の探求力」を遺憾なく発揮します

主催：慶応義塾大学教養研究センター お問い合わせ：toiwase-10@adcf.keio.ac.jp



の伝統的傾向には違いないのだが、2022年度には拍車がかかったと言える。教員のいっそうの工夫も求められるだろうし、場合によっては、通年の履修をひとつの前提とするカリキュラムそのものを考え直す必要も出てくるであろう。

（片山杜秀）

1 設置科目

1-2 生命の教養学

—記憶—

2022年度の「生命の教養学」のテーマは「記憶」だった。コロナ禍を経て2年越しの実現を見た今回の授業では、生命を規定する生物学的・文化的条件としての記憶の問題に迫る、11名の専門家による連続講義が行なわれた。講演者（所属・職位、専門）と講義題目は以下の通り（敬称略、登壇順）。

- ①高橋宏司（京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所助教、魚類心理学）「身近なサカナの学習と記憶」。
- ②有川智己（本学経済学部教授、生物学・系統分類学）「人間の体内に「遺伝子の記憶」は眠っているか？」。
- ③坂内博子（早稲田大学先進理工学部教授、神経科学・生物物理学）「分子のふるまいから読み解く記憶のしくみ」。
- ④伊藤昭博（東京薬科大学生命科学部教授、ケミカルバイオロジー）「遺伝情報の記録と記憶」。
- ⑤佐藤真一（大阪大学名誉教授／大阪府社会福祉事業団特別顧問、老年心理学）「認知症と記憶」。
- ⑥河島茂生（青山学院大学コミュニティ人間科学部准教授、メディア研究・情報倫理）「40億年の来歴と革新技术」。
- ⑦伊東裕司（京都女子大学発達教育学部教授、認知心理学）「生きるための記憶：人間の記憶の使われ方」。
- ⑧中島那奈子（ダンスドラマトゥルク、ダンス研究）「ダンサーの記憶、アーカイブの記憶」。
- ⑨安川晴基（名古屋大学大学院人文学研究科准教授、ドイツ文学・文化研究）「戦後ドイツの「想起の文化」とカウンターモニュメント」。
- ⑩福田桃子（本学経済学部准教授、フランス文学）「記憶と喪失——マルセル・プルースト『失われた時を求めて』読解」。
- ⑪村山達也（東北大学大学院文学研究科・文学部教授、哲学・倫理学）「私やあなたは記憶なしに私やあなたでありうるか——愛の哲学の観点から」。

以上、自然科学から社会科学の知見を経て人文科学の考察へと向かう一連の講義は、「記憶」というテーマの広がりや奥深さを実感させる非常に刺激的な議論となった。

2022年度の履修者は106名（内訳は理工：45名、商：28名、薬：24名、経済：2名、文：3名、法・環境情報・看護・SDM研究科：各1名）で、偏りはあるもののほぼ全学部の学生の参加を得ることが



高橋 宏司 氏



坂内 博子 氏



中島那奈子 氏

できた。活気あふれる各回の質疑応答と最終日の全体討論の様子からは、多くの学生が学際的な知の醍醐味に触れてくれた様子が窺われた。なお、本授業の講義記録が教養研究センター HP 上で公開されているので、ご覧いただければ幸いです。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/publication/uploadimages/pdf/1680244481.pdf>

（西尾宇広）

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-3 身体知

—創造的コミュニケーションと言語力

教養研究センター設置科目の「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、夏の6日間を使つての集中講座である。本講座は文学作品を書かれた言語のみならず、演劇やダンス・ムーヴメントなどの身体表現や視覚芸術を使つて読み解き、その体験をまた言語表現へと還元していくという新しい教育モデルとして、2010年に開講された。また、通学生が年齢やバックグラウンドの異なる通信教育課程の学生と共に学ぶというユニークな履修者構成も、世代を超えた文学解釈と表現体験を可能としている。

2022年度は、通信教育課程の夏季スクーリングが対面形式に戻ったために、文学部の若澤佑典と法学部の横山千晶の2名の教員をファシリテーターとして、3年ぶりの通学生・通信教育課程合同での対面授業として開講された(2022年8月15日~20日)。対面授業への期待もあってか、通学生の本年度の応募は定員10名の2倍の申請応募があり、通信教育課程の申請応募に関しても定員10名に対し、23名の応募があった。

コロナウイルス禍中において、久々に20名の履修者を迎えての開催となることから、安全な対面型の身体ワークショップを可能とし、創造性に満ちた授業の運営と教育効果を得るために、2022年度は、パンデミック禍の身体ワークショップの実績があるコミュニティダンスの実践家でありアーティストの寒川明香氏をお招きした。氏の協力を得て、心身ともに安全な対面型のワークショップを実現し、身体表現の可能性を広げ、言語教育の充実をはかる授業の実現を目指した。その目標を念頭に、若澤と横山の二人の講師と、寒川氏との事前打ち合わせも何度か行い、授業に臨んだ。

今年の「身体知」の授業では、このパンデミックの状況を振り返ることも念頭に置いて、「さかのぼる」をテーマに文学作品を選んだ。授業では、時間をさかのぼる、歴史をさかのぼる、思想の流れを遡及する、などの様々な視点から言語表現を分析し、



ペアワーク、グループワークによる身体ワークショップ、およびダンス・ムーヴメントを取り入れたコミュニティダンスの手法を使った表現を授業の中に取り入れながら、創作活動を行った。

寒川氏には、創作活動に具体的に協力しながらも、安全な身体知活動のための見守りもお願いした。氏の協力によって、授業参加者は安心して身体活動に参加できたのみならず、個人・およびグループでの素晴らしい創作を発表することが可能となった。

同時にアーティストである寒川氏にとっても今回の講師の経験は、本人の創作活動に大きな影響を与えたことも特記しておきたい。現在寒川氏は、この身体知の授業の経験を活かしながらアーティストとしてのみならず、コミュニティダンスのファシリテーターとして活躍なさっている。このような相互の影響も本授業の重要な成果であろう。

(横山千晶)

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-4 身体知・音楽

【株式会社白寿生科学研究所寄附講座】

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」では、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座として、2022年度においてはこれまで通り、2つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」(器楽クラス)であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」(声楽クラス)であった。後者では2021年度に引き続き、ある程度ではあるが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の対策を施しながら授業が行われた。結果、声を出す実践的な内容にかかわらず、授業内で感染が拡がることはなかった。器楽クラスでは、感染症拡大以前の形で、授業が運営された。

2022年度の器楽クラスは、前年度同様、30人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、日本では、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は無い。ちなみに、国内では、常設のプロの演奏団体すらこのような大きなアンサンブルは稀である。

器楽クラスの成果発表演奏会は、例年通り2回行われた。第1回となる室内アンサンブルの演奏会は2年目以降の履修者が中心となって、11月6日に行われた。そこでは、17世紀イタリアの女性作曲家であった、イザベラ・レオナルダの作品を取り上げた。授業の参加者全員による古楽オーケストラの演奏会は、フランスバロック後期のオーケストラ作品を中心としたプログラムで、12月24日に開催された。

声楽クラスにおいては、昨年度同様、少人数のメリットを生かして、きめ細かな指導が行われた。取



り扱った音楽作品はバッハのカンタータとコラールで、2022年度は新しい試みとして、声楽クラスと器楽クラスの古楽オーケストラが共演した(バッハのカンタータ第192番全曲を12月11日の演奏会で披露した)。さらには、2021年度に中止となった、横浜市からの招待による新市庁舎アトリウムスペースでの演奏会は、2022年度は2023年1月8日に、器楽クラスと声楽クラス合同で無事に催された。

成果発表演奏会すべてにおいて、YouTubeを介したライブ配信を昨年度に引き続き行った。

(石井 明)

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 日吉学

[株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座]

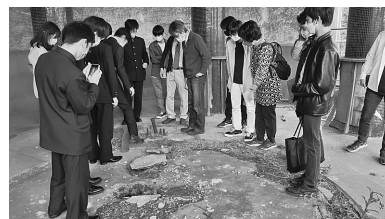
—「景観編」：われらのランドマークを見つけよう—

2019年度に正規科目化された「日吉学」は、その翌年からのコロナ禍の影響で、完全な対面での授業を行うことができず、歯がゆい思いをしてきたが、2022年度の「日吉学」は、遂に完全対面授業で行うことができた。2022年度のテーマは「景観編」とし、日吉キャンパスや日吉の街のなかから、過去や未来の日吉像の糸口になるようなランドマークを各自が発見し、それをもとに掘りさげるといふものであった。

第1回は、「景観とは何か」(安藤広道)として、校舎や樹木や街路といった日常、何気なく目しているものが歴史の入口になることを示し、全体の方向性を学生に提示した。第2・3回(阿久澤武史・都倉武之)は日吉キャンパスの景観の成り立ちを探り、第一校舎、寄宿舍、チャペル等を見学し、ディスカッションを行った。第4・5回(太田弘・木村昌人)は、日吉の市街地の成り立ちを考察し、日吉の市街地の設計には、渋沢栄一の田園都市構想が関わっていることを紹介した。その後、実際に日吉の放射状に広がる街区を歩いてそのことを確認した。第6・7回(福山欣司・杵島正洋)は、日吉の自然景観に焦点を絞り、キャンパスの銀杏並木や記念館裏の蝮谷を歩き、人工の景観と自然のままの景観との違いを学生に実感させた。第8回以降は、第1回から第

7回までの授業で各自が発見した問題を掘りさげ、4000字のレポートにまとめる作業を行った。最初に、発想法をテーマにして、いかにして発想して、一つの問いに収斂させていくのかということを中心にマインドマップのワークショップを通じて行った(大出敦)。ここで考えついたテーマをもとに学生たちは、各自でアウトラインを完成させ、文献を補充し、本文を肉付けしていく作業をしていった。この間、論文の書き方やプレゼンテーションの仕方のミニ講義(不破有理)を行い、学生にアカデミック・ライティングの基本を習得させた。こうして出来上がったレポートを第13回、第14回の2回にわたって発表して、2022年度の授業を締めくくった。

2022年度の日吉学の特徴は、株式会社コーエーテクモホールディングスと慶應義塾大学出版会の協力のもと、反転学習を取り入れたことにある。景観について、日吉キャンパスの景観、日吉市街地の景観、日吉の自然景観の4本の動画を作成し、学生はこれらの動画を事前に視聴してから授業に臨むようにした。このことによって従来、講義に割いてきた部分をディスカッションなどのアクティビティに使用することができ、学生の理解をさらに深めることが可能となった。また後半部分では、学生同士で自分たちのテーマやアウトラインを相互に批評するピアレビューを取り入れた点も特徴といえるだろう。(大出 敦)



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-6 ゲーム学

[株式会社コーエーテックモホールディングス寄附講座]

「ゲーム学」はデジタルゲームをアカデミックに考察することを目的とした講座であり、2021年度の実験授業を経て、2022年度秋学期に正規科目として開講された。この記念すべき初年度は株式会社コーエーテックモホールディングス代表取締役社長、襟川陽一氏、ならびに同社執行役員フューチャーテックベース部長、三嶋寛了氏による特別講義を皮切りに、以下のプログラムがつつがなく実施された。約100名の履修者は、そのほとんどがコンスタントに出席して興味関心を維持し、学期末の授業アンケートでは約7割の学生から「とても興味深かつ

た」との回答があった。なお、漫画、アニメ、ポップミュージックなど、いわゆるサブカルチャーとして括られる分野についての研究、教育活動を今後、義塾でどのようにおこなっていくかという問題については、本講座を含む三講座が主体となり、12月に三田キャンパスにて「慶應義塾大学エンターテインメント三講座合同シンポジウム」と題したシンポジウムを開催し、議論を深めた。この勢いに乗り、二期目となる2023年度秋学期の「ゲーム学」開講に向け、ひき続き準備を進めていきたい。

(新島 進)



ローベル, ロラン 氏



牛場 潤一 氏

2022 年度秋学期 「ゲーム学」

■社会を考えるためのゲーム

井上明人 (立命館大学 映像学部 専任講師)

■脳の学習機構とゲーミフィケーション

牛場潤一 (慶應義塾大学 理工学部 教授)

■特別講義

襟川陽一 (株式会社コーエーテックモホールディングス 代表取締役社長)

三嶋寛了 (同社 執行役員 フューチャーテックベース部長)

■中国巨大市場への挑戦

大里雄二 (日中エンタメプロデューサー)

■日本のゲーム産業

小山友介 (芝浦工業大学 システム理工学部 教授)

■ゲームと文学、テキストと身体性

新島 進 (慶應義塾大学 経済学部 教授)

■アニメ産業 20年ぶりの地殻変動とゲーム産業

平澤 直 (アーチ株式会社 代表取締役)

■ゲームとしての人生 — その精神分析的構造

藤田博史 (医療法人ユーロクリニック理事長・精神分析医)

■ゲームとアニメのメディアミックス

三原龍太郎 (慶應義塾大学 経済学部 准教授)

■ミクになり、ミクを演じる、ちょっと楽しい画像解析技術

満倉靖恵 (慶應義塾大学 理工学部 教授)

■バーチャルリアリティの進化、拡張するゲーム体験

南澤孝太 (慶應義塾大学 大学院 メディアデザイン研究科 教授)

■数値で見る「三国志」のリアリズム ～序列化されるキャラクター～

吉永壮介 (慶應義塾大学 文学部 教授)

■フランスにおけるビデオゲーム

ローベル, ロラン (慶應義塾大学 商学部 訪問講師)

2 実験授業

2-1 庄内セミナー

2019年に庄内セミナーを挙行了した半年後から、まさかのキャンパス封鎖とオンライン授業の嵐となり、セミナーは2年間中止となった。コロナ禍の間、鶴岡市の皆様が庄内セミナーの再開を信じ、支え続けてくださったことは、我々の希望の光であった。

2022年度の庄内セミナーは徹底した感染対策のもと、規模を縮小して募集をかけたところ、予想をはるかに上回る応募があり、最終的に12名の学生と5名の引率者で、8月30日から9月2日まで庄内を満喫できた。

第11回目を数える今回は、「庄内に学ぶ生命（いのち）—今あらためて死から生を考える—」というテーマを設定した。青春真っ只中の高校生活・希望一杯の大学生活をコロナに覆われ、当たり前前日常が覆された（自分たちの当たり前前日常の「死」を経験した）学生たちが対象である。有名人から一般人まで様々な死の有りようを考えさせる多くの報道にも接してきた彼らに、「あらためて」死と生の意味を問いかけることにした。

慶應の学生という以外には接点が無い他人とグループを組み、死と生について討論を重ね、纏め上げて発表するのが庄内セミナーの特色のひとつである。前回よりディスカッションの時間を多く取ることができた。

もうひとつのセミナーの贅沢な特色は、地元の方々や慶應の先生方から集中的にお話を伺えることである。今回のセミナーは鶴岡メタボロームキャンパスで開始した。メタボロームとは細胞内の全代謝物質を網羅的に解析する鶴岡発の技術のことだが、その技術の研究と様々なバイオ事業の中核である慶應義塾大学先端生命科学研究所の富田勝所長に、この20年間の先生個人と研究所の数々の挑戦、そして慶應鶴岡発のベンチャー企業の広がりや未来についてご講演いただき、ラボ棟の最先端の設備を拝見した。夜には、理工学部で生体医工学がご専門の塚田孝祐先生に、思春期・若年成人がん患者の妊孕性温存という選択肢のための最前線の医工学研究についてご紹介頂いた。若き人々の、そして我々が生きる社会の「未来」と、「現在」の自分の立ち位置・知の最前線とを結ぶ1日となった。

2日目は、一気に過去からのスタートである。青空と田園風景の中に立つ仁王門をくぐり、瀧水寺大日坊でご住職からご説明を受け即身仏一真如海上人

慶應義塾大学教養研究センター主催

第11回 庄内セミナー

『庄内に学ぶ「生命」』 —今、あらためて死から生を考える—

庄内セミナーは、山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点にして開催する生命をテーマにした体験型セミナーです。修験体験、即身仏拝観、TTCK先端生命科学研究所ラボ見学、講義と対話、地元との交流を通して庄内地方の歴史、文化、自然を体感して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：2022年8月30日（火）～9月2日（金）3泊4日
 場所：山形県鶴岡市（鶴岡タウンキャンパス他）
 定員：15名程度 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生
 参加費用：8,000円 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。

■参加申込 ※新型コロナウイルス感染状況により中止される可能性があります。
 6月20日（月）～7月15日（金）午前中まで
 ■詳細・申込 <https://bit.ly/3Mge8AI>
 (要keio.jp認証)
 ■参加者事前講習会・説明会
 8月1日（月）13:00～15:30（予定）
 来往舎1階シンポジウムスペース

修験体験：羽黒山にて
 お問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

のお姿を拝観し、羽黒山山頂付近にある出羽三山神社参籠所 斎館で精進料理を堪能した後、山伏の出で立ちの田村廣実様に先導していただいて、出羽三山神社の境内や芭蕉の像、さらに羽黒山の2446段の石段を五重塔まで下った。夕方には郷土文学研究家の東山昭子先生に「庄内で大切にされている『言葉に拾う』その風土的特性」というタイトルで、庄内の人々を今日まで支え励まし続けてきた言葉の数々についてご講演頂いた。

3日目の修験体験は、庄内セミナーでは初めてのコースである湯殿山で行った。雨天の中、黙々と地を踏みしめ、祈り、無我夢中で前を追いつけた。一行を導いて下さり一人一人に特別な体験を授けてくださった、いでは文化記念館の早坂一広先達、星野綱樹先達、そして吉住弘幸様に厚く御礼申し上げます。

最終日には庄内藩校「致道館」に赴き、慶應義塾高等学校の鳥海奈都子先生に、論語が今日の私たちに伝えてくれているもの、庄内における論語について解説して頂いた。さらに鳥海先生の音読のリードに続いて、しっかりと発声で論語の素読をすることで、体を通して庄内論語を味わうことができた。このような場を与えて下さった致道館の富樫恒文



氏に感謝申し上げます。そして最後のグループ発表では、3つの班が、連日の議論の末にそれぞれに辿り着いた「承けたもう」「自然」「遺すということ」というタイトルで、庄内の4日間を見事に総括した。

修了式には酒井家第18代当主酒井忠久様にお運び頂いた。2022年は酒井家の庄内入部400年という大きな節目であり、シンポジウムや特別展をはじめ様々なイベントが続く特別な年であった。酒井家の歴史と今とを結ぶ文化的視点について学生に語り掛けて下さったことで、歴史の重みばかりでなく、

歴史を創り伝える日々の営みを肌で感じる事ができたことは大きな学びとなった。

2022年度の庄内セミナー実施にあたり、鶴岡市役所の皆川治市長と政策企画課の皆様、鶴岡羽黒の各所の皆様に多大なるご理解とご支援を賜った。皆様に、そして（おそらく時にハラハラしながら）私たちを見てくれていたお山にも、深く感謝申し上げます。

（鈴木亮子）

2 実験授業

2-2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。2022年度は、春学期に3件、秋学期に3件の講演をすべて対面で実施した。

春学期では、まず、福井健策氏（弁護士）が「メタバース（仮想世界）のルールと権利講座」という題目で講演した。メタバースを対象とした法律がまだ存在しない状況において、著作権、肖像権、商標権、意匠権が既存の法律でどう解釈されるか考察した。次に、伊藤公平塾長は「情報に踊らされず、世界を平和に導く!」という講演で、情報があふれている世の中で、人工知能への依存、意図的な情報操作、探さないと知りえない情報など、例をあげながら解説した。そして、自分で考えることやお墨付きの情報の重要性について述べた。春学期の最後に、土屋大洋理事は「サイバークレートゲーム：デジタル技術が変える国際政治」という題目で講演した。フェイクニュースの拡散や印象操作などについて述べるとともに、データセンターや海底ケーブルなどサイバー空間を可能にしている施設の重要性について話した。

秋学期では、まず、栗原聡氏（理工学部教授）が「考える葦と AI との共進化」という題目で、AI と人間の共生の必要性を説いた。人間は熟考が得意である反面、直感的に判断し、必ずしも合理的に判断しない。AI が作り出す情報の世界では、熟考するためのコンテクストがないため、共生の難しさをあげた。次に、安宅和人氏（環境情報学部教授・Zホールディングス（株）シニアストラテジスト）は「時代と知性を考える」という題目で講演した。情報が大量にある現在、事実（データ）をとってくる能力およびそれを正しく解釈する能力の必要性を説いた。また、データの指数関数的な変化に注意することも重要であると述べた。最後に、満倉靖恵氏（理工学部教授）は「デイリーセンシングで賢く自分らしく生きる～生体信号を用いた感情認識から病気の予兆検出まで～」という題目で講演した。研究で開発したデバイスにおいて、データに入っている

ノイズの処理がいかに重要かを説くとともに、AI を用いたデータ処理の問題についても述べた。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発であった。春・秋の講演の一部の動画は、下記の情報の教養学のホームページから視聴できる。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/information/>

(高田真吾)

2 実験授業

2-3 エンターテインメントビジネス論

2022年度春学期に、全7回の実験授業「エンターテインメントビジネス論」を実施した。アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスは、法学・経済学・商学・文学・理工学など、多くの学問領域を横断する学際的分野であるが、大学において当該分野を正面から扱っている授業は少ない。しかし大学でこのエンターテインメントビジネスを学び、卒業後に関連の業界でのキャリアを志向する学生は非常に多く、本講座はそうしたニーズに応えるべく、エンターテインメントビジネスについて理論と実務の双方から学際的・分野横断的にアプローチする授業を展開した。

第1回から第3回まではゲストスピーカーとして、『推しエコノミー「仮想一等地」が変えるエンタメの未来』などの著書で近年エンターテインメントビジネスの分野を牽引する研究者となっている中山淳雄（経済学部訪問研究員）が担当し、まず第1回「モバイルゲームビジネス概論」で全体のパースペクティブを示した後、第2回「『ソードアート・オンライン』分析」と第3回「『八月のシンデレラナイン』分析」において、業界の関係者へのインタビューに基づく個別事例の分析を行った。続く第4回ではコーディネーターの山下一夫（理工学部）が「日本と中国のアニメーション」、第5回では吉川龍生（経済学部）が「中国語圏映画におけるゲームの可能性」、第6回では三原龍太郎（経済学部）が「日本のアニメビジネスとアジア」と題した講演を行い、最後の第7回ではそれまでの担当者全員で総合討論を行った。コロナ禍での開催となったため、会場のシンポジウムスペース自体は、かなりの人数を収容することができるのにもかかわらず、人数制限を行わざるを得なかったのが残念だったが、毎回の授業では出席者と登壇者の間で活発な議論が交わされ、非常に満足度の高い内容となった。これを受け、2023年度からは正規の授業として開講していくこととなった。

(山下一夫)

教養研究センター主催 実験授業 (2022年度・全7回)

エンターテインメントビジネス論

アニメ・ゲームIPの作り方



アニメやゲームなどが好きで業界の構造に興味を持っている学生や、卒業後はエンターテインメント業界で働きたいと思っている学生は多いと思います。本講義は、法学・経済学・商学・人文学・理工学など様々な分野に跨がるエンターテインメントビジネスの広がりとその可能性について、主に「アニメ・ゲームIPの作り方」に焦点を当てつつ学びます。

山下一夫: 慶應義塾大学理工学部教授、実験授業「エンターテインメントビジネス論」コーディネーター

中山淳雄: (株)Re entertainment代表取締役社長、慶應義塾大学経済学部訪問研究員

『推しエコノミー「仮想一等地」が変えるエンタメの未来』(日経BP, 2021年)

『オタク経済圏創世紀 GAFアの次は2.5次元コミュニティが世界の主役になる件』(日経BP, 2019年)

三原龍太郎: 慶應義塾大学経済学部准教授

『ハルヒ in USA 日本アニメ国際化の研究』(NTT出版, 2010年)

吉川龍生: 慶應義塾大学経済学部教授

5月10日(火) エンターテインメントビジネスの全体像(中山淳雄)
 5月17日(火) インタビュー①:メディアミックスプロジェクト(中山淳雄)
 5月24日(火) インタビュー②:ソードアートオンライン分析(中山淳雄)
 6月 7日(火) 日本と中国のアニメーション(山下一夫)
 6月14日(火) 中国語圏映画におけるゲームの可能性(吉川龍生)
 6月21日(火) 日本のアニメビジネスとアジア(三原龍太郎)
 6月28日(火) 総合討論(山下一夫・中山淳雄・三原龍太郎・吉川龍生)

時間: 各回とも18:10~19:40 / 会場: 日吉キャンパス来客室1Fシンポジウムスペース

対象: 塾生【要事前申込・先着50名】

受付: 4月15日(金)午前10:00~5月3日(火)23:59頃切 *定員になり次第、締め切ります*

*全7回対面形式を予定していますが、新型コロナウイルス感染状況によりオンライン開講となる可能性があります。

【申込】 <https://bit.ly/35JLxUQ>

要 keio.jp 認証 (keio.jp 以外の Google アカウントにログインしているとアクセスできません。一度全てのアカウントからログアウトし、ブラウザを落としてから再度 Keio.jp にログインし直してください)

問い合わせ先: 教養研究センター toiwase-lib@adst.keio.ac.jp



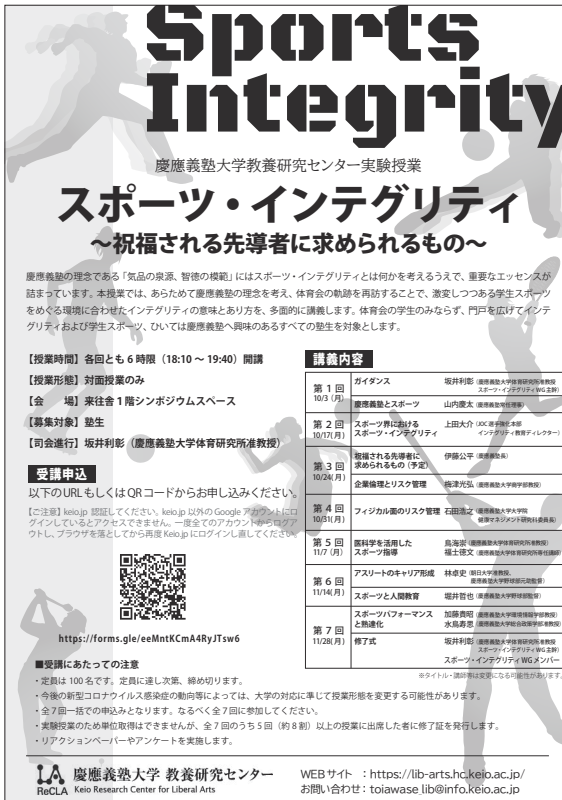
2 実験授業

2-4 スポーツ・インテグリティ

社会の規範や価値観の変化を受けて、慶應義塾体育会の本懐は何か、期待されている役割や意義を果たしているのか、という問題意識を抱かざるをえなくなってきたのが昨今の体育会の置かれている状況である。そのような中で、体育会の原点に戻り、体育会部員が誇りを持って活動できるような基盤を整えるべく、実験授業「スポーツ・インテグリティ」を実施した。これは同じく体育会への問題意識を持たれていた慶應義塾体育会出身の篤志家の方から頂いた体育会指定寄付を原資とさせていただくことで実現したものである。

インテグリティとは一般に「誠実、真摯、高潔」を意味するが、慶應義塾のスポーツ・インテグリティは義塾の基本理念「気品の泉源、智徳の模範」に置き換えられる。従ってこの講義では、高い志をもって公共の発展に尽くし「全社会的先導者」を体現するような人材を、スポーツを通して育成することを目指している。伊藤公平塾長はこの講義の中で、「スポーツ・インテグリティ」を達成するために心がけるべきことを三点述べられた。一つ目は、理想を追求するためには、やらなければならないことを着実にこなすことに加えて、毎日の小さな背伸び・挑戦を繰り返さなければならないということ。二つ目は、井の中の蛙になることなく、常に世界に目を向けて新しい情報をアップデートしていかなければならないということ。三つめは試合においてハードファイターでありながら、フェアプレーを徹底するような、誰からも応援される祝福された先導者を目指さなければならないということ、である。人としての正しい道を極めながら、学問の習得とスポーツの熟達を目指すことが、慶應スポーツに求められる姿勢なのである。

本講義は、体育会部員だけでなくすべての学生を対象として、スポーツ・スポーツ医学・スポーツサイエンス・義塾史といったそれぞれの分野を専門とする講師により実施された。2023年度秋学期には体育研究所設置科目の体育学講義として単位を取得



Sports Integrity

慶應義塾大学教養研究センター実験授業

スポーツ・インテグリティ

～祝福される先導者に求められるもの～

慶應義塾の理念である「気品の泉源、智徳の模範」にはスポーツ・インテグリティとは何かを考えるうえで、重要なエッセンスが詰まっています。本授業では、あらためて慶應義塾の理念を考え、体育会の軌跡を再訪することで、激変しつつある学生スポーツをめぐる環境に合わせたインテグリティの意味とあり方を、多面的に講義します。体育会の学生のみならず、門戸を広げてインテグリティおよび学生スポーツ、ひいては慶應義塾と興味のあるすべての学生を対象とします。

回	講義内容	講師
第1回 10/3(月)	ガイダンス	坂井利彰(慶應義塾大学体育研究所准教授)
第2回 10/7(月)	慶應義塾とスポーツ	山内慶太(慶應義塾体育会)
第3回 10/24(月)	スポーツ界に對けるスポーツ・インテグリティ	伊藤公平(慶應義塾)
第4回 10/31(月)	祝福される先導者に求められるもの(予定)	伊藤公平(慶應義塾)
第5回 11/7(月)	企業倫理とリスク管理	純澤元弘(慶應義塾大学法学部)
第6回 11/14(月)	フィジカル面のリスク管理	石田浩之(慶應義塾大学大学院)
第7回 11/28(月)	アスリートのキャリア形成	林成俊(神戸大学)

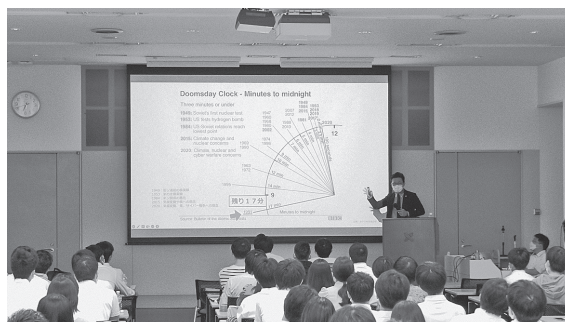
【授業時間】 各回とも6時間(18:10～19:40)開講
 【授業形態】 対面授業のみ
 【会場】 来待舎1階シンポジウムスペース
 【募集対象】 塾生
 【司会進行】 坂井利彰(慶應義塾大学体育研究所准教授)

受講申込
 以下のURLもしくはQRコードからお申し込みください。
<https://forms.gle/eeMntKcM48rjJTs6w>

【注意】 keio.jp 認証してください。keio.jp 以外の Google アカウントでログインしているとアクセスできません。一度全てのアカウントからログアウトし、ブラウザを落としてから再度 keio.jp にログインし直してください。

■受講にあたっての注意
 ・定員は100名です。定員に達し次第、締め切ります。
 ・今後の新型コロナウイルス感染症の動向等によっては、大学の対応に準じて授業形態を変更する可能性があります。
 ・全7回一括での申込みとなります。なるべく全7回に参加してください。
 ・実験授業のため単位取得はできませんが、全7回のうち5回(約8割)以上の授業に出席した者に修了証を発行します。
 ・リアクションペーパーやアンケートを実施します。

IA 慶應義塾大学 教養研究センター WEBサイト : <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>
 ReCLA Keio Research Center for Liberal Arts お問い合わせ : toiawase.lib@info.keio.ac.jp



できる形で「スポーツ・インテグリティ 寄附講座」が開講される予定である。この講義を通して、引き続き慶應義塾らしい「スポーツ・インテグリティ」を模索し、慶應スポーツのあるべき姿を確立していくことを目指していきたいと考えている。

(坂井利彰)

3 「学び場」プロジェクト

2022年度の冒頭、教養研究センターと日吉メディアセンターの共同事業であるところの「学び場プロジェクト」は一種の危機を迎えたと言っている。

教養研究センターの責任において選抜した学生に、日吉メディアセンターで学習相談員として勤務してもらう。それが本事業の骨子であるが、では学習相談員の「供給源、はどこか」といって、教養研究センターの設置科目のアカデミック・スキルズである。その名の通り、大学での学びのためのスキルを身につけるための授業であり、通年の履修を望ましいかたちとし、学生は少人数、教員は複数で、論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を中心に学ぶ。教養研究センターがアカデミック・スキルズを今世紀初頭に始めた際の内なる心積もりは、同種の授業を諸学部の初年次教育で必修化、若しくは準必修化していくためのモデルを確立しようとしたことだと、諸先輩から聞き及んでおり、その後、似たタイプの授業は、確かに学部設置のものでも増えているように観察されるので、教養研究センターの初心は幾分なりとも果たされているとは言える。だが、まだまだ道半ばでもあり、そのうえ教養研究センターの能力ではアカデミック・スキルズの規模を拡張していくのにも限界がある。そこで、同授業の決して多くはない既習者（毎年数十人程度）から、優秀な学生にメディアセンターの学習相談員ともなってもらい、同センター1階の相談窓口にて座ってもらって、レポート執筆法からノート・テーキングまで、塾生の学びに役立つようにし、合わせてアカデミック・スキルズの技をたとえ片鱗でも広く伝えてゆきたい。それが「学び場プロジェクト」の趣旨であろうかと理解している。ということは、学習相談員になる学生は原則としてアカデミック・スキルズの既習者が望ましい。

ところが、2021年度に、「学び場プロジェクト」の前提をなすアカデミック・スキルズが開講されなかった。講座運営に必要な欠くべからざる寄付元を喪失したので、そうせざるを得なくなった。年間通じて閉じてしまうのは、アカデミック・スキルズにとって初めてのことである。「学び場プロジェクト」の学習相談員はというと、毎年十数名規模で構成されるのが慣例であり、年毎におよそ半数前後が入れ替わる。その分を、アカデミック・スキルズの履修を前年度に終えた人たちから新規に選ぶ。どうして

そのレポート、はかどってる??

！

ひあくろう

塾生の塾生による塾生のための
学習相談

・引用、参考文献の書き方が分からない…
・自由に論じろって何を書けばいいの？
・プレゼンがうまくなりたいたい…

こんな悩みに
塾生のピアメンターがアドバイスします！

☆日時 4月18日(月)～19日(金) 平日 午後
くわしい開催日時はWEBサイトで確認してください。
「日吉図書館 学習相談」で検索
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hvs_studyadvice

☆場所 日吉図書館1階 スタディサポート または Webex
☆問い合わせ先 日吉メディアセンター hacref@group.keio.jp
カウンターへ直接お越しください！
WEBからの予約やオンライン相談も可能です！
共催：教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部



も足りない場合は、アカデミック・スキルズ既習の学部生以上の相談能力があると見なされる大学院生（学部時代にアカデミック・スキルズを履修したかしなかったかは問わない）から探す。それがいつものやり方なのだが、2022年度は繰り返せば前年度のアカデミック・スキルズが無かった。疫病禍のせいで学生生活のありようが大きく変わったせいもあり、大学院生から募るための有効な手立ても見つけられなくなった。こうして新規の相談員の獲得が従来の方法では覚束なくなってしまった。もしも欠員が補えなくなれば、メディアセンターでの窓口業務は回らなくなり、仕組みの存続に重大な支障をきたす。

この難関を乗り切らねばならない。幸いというべきか、学習相談員のなり手はアカデミック・スキルの履修者を多分に想定してはいるものの、そうでなければならぬという規定はない。充足できないときはアカデミック・スキルズと無関係の大学院生にもお願いしてきた過去の実績が示す通りである。そこで2022年度の新規採用者の集め方については些か変則的な策を用いることとした。アカデミック・スキルズと「学び場プロジェクト」の両方の性質と内容を熟知している何人かの教員に、アカデミッ

ク・スキルズ既習相当と考えられる学部生を各種少人数授業から推薦してもらい、そこから選抜したのである。

そうして行なわれた2022年度の「学び場プロジェクト」の学習相談内容は例年に比して遜色なかったと自己評価でき、とりあえず危機は乗り切れたものとする。2022年度にはアカデミック・スキルズも改めて開講できた。「学び場プロジェクト」の継続と発展に引き続き邁進してゆく覚悟である。

(片山杜秀)

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、日吉のキャンパス内外のコミュニティーを対象とした、もしくは新入生を歓迎することを主な目的とした行事を委員会で企画し、春および秋学期においてそれらを催してきている。また、秋学期においては、塾生および教職員から企画を募集し審査を経て採択した催し物を主催している。なお、委員会で企画したイベントは、継続性の強い催し物を優先して開催している。

2022年度のHAPPが企画した催し物は、2021年度同様6つあった。これらには、毎年恒例となっている舞踏の公演、著名者による講演会、複数回の演奏会が開催される「日吉音楽祭」および日吉メディアセンターの中でのコンサートなどが含まれていた。全体を通じて、COVID-19の影響は薄らいできた感があったが、すべてが感染症拡大以前のようなかたかという、なかなかそうはならなかった。入場制限が設けられたり、完全オンラインもしくはハイブリッド形式での開催が前提となっていた企画もあった。

その一方で、ライブ配信等の経験は、今後のHAPPの発展につながっていく可能性が改めて見出された。つまり、イベント当日に会場に何らかの理由で来られない人々に対しても、インターネットを介して視聴者として参加してもらうことができる機会を提供できたということが確認された。特に、配信がライブに限定されず、後日にアクセスできるように設定されていれば、記録としての役割を持たせることができるということも、今後注目されるべき

事柄であることが認識された。

2022年度のHAPP主催の企画は、次であった：
 1) 図書館で行われたライブラリーコンサート（5月20日と5月25日の、異なる内容の公演2つ）、
 2) 実践的なアプローチを含んだ「ワークショップレクチャー『コロナを超えて』コロナ時代のメイクアップ」（6月8日）、
 3) 能楽を探求する企画である「能の流儀—謡と仕舞—」（6月11日）、
 4) アートセンターとの共催であった「笠井叡ポスト舞踏公演」（10月19日）、
 5) 「教養の一貫教育」と位置付けられた「吉増剛造×大友良英～詩と音楽の交差するところ2～」(10月21日)、そして6) 日吉音楽学研究室による、「日吉音楽祭2022」の枠組みで行われた演奏会2本（11月6日および11月26日）であった。

公募企画について2022年度は、感染症拡大の影響のため、広報を縮小した形で募集を行い、「国民文化のなかのタイ舞踊」（2023年1月17日）を開催することができた。2020年度と2021年度において公募を中止したことを考えれば前進であった。

2023年度以降、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということを目指すHAPPの活動は、COVID-19以前のような状態に戻ることが期待されている。HAPP全般については、HAPPのホームページ (<https://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。

(石井 明)

2022年度 実施企画一覧

No	企 画 名	日 程
1	Library Concert 2022	5月20日(金) 15:00～(ジャズ) 5月25日(水) 15:00～(弦楽四重奏)
2	ワークショップレクチャー「コロナを超えて」コロナ時代のメイクアップ	6月8日(水) 16:30～18:30
3	能の流儀 一謡と仕舞一	6月11日(土) 14:00～16:00
4	笠井叡ポスト舞踏公演「今、ショパンを踊る」	10月19日(水) 16:30～
5	教養の一貫教育 Vol.5「吉増剛造×大友良英 詩と音楽の交差するところ2」	10月21日(金) 15:15～17:30
6	日吉音楽祭2022	11月6日(日) 14:00～ 11月26日(土) 14:00～
7	国民文化のなかのタイ舞踊—講演、実演、体験—	2023年1月17日(火) 17:00～

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project (HAPP)

日吉図書館
Library Concert 2022
at Hiyoshi Library

5.20 Fri. 15:00 ~

Jazz

Guitar 井上 晋
Organ 土田 晴浩
Drums Dennis Fretsch

5.25 Wed. 15:00 ~

Quartet

1st Violin 水佐 篤子
2nd Violin 三村 希生子
Viola 阪本 奈津子
Cello 西谷 牧人

予約不要・入場自由 (学内者・図書館入館資格のある方)
No reservation required / Only persons eligible for admission to the library
LIVE配信も行います。詳細はWebサイトをご覧ください。
https://libsites.lib.keio.ac.jp/hys_events/libcon2022

主催 | 慶應義塾大学教養研究センター行事企画委員会 / 日吉メディアセンター
問合せ | 日吉メディアセンター Tel. 045-566-1040 Email. hac-ref-group@keio.jp

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project

新入生歓迎行事
ワークショップレクチャー「コロナを超えて」

コロナ時代のメイクアップ

2022 6.8 (木) 16:30~18:30

会場 | 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

講師 | 松下 里沙子 **メイクアップアーティスト**・講師
コーディネーター | 小宮 草人 教養研究センター 事務

定員 | 50名 (定員になり次第募集終了です)

参加費 | 無料 (参加費も参加できません。特に新入生を歓迎します。)

申し込みフォーム | <https://forms.gle/94T7GfLk3J5T8BA>

主催 | 慶應義塾大学教養研究センター行事企画委員会 (HAPP)
共催 | HAPP事務局 | happ@libsites.lib.keio.ac.jp / 小宮 草人 (教養研究センター 事務) hac-ref@keio.jp

慶應義塾大学教養研究センター Hiyoshi Arts & Performance Project

新入生歓迎行事
能の流儀
謡と仕舞

能楽には古きよき文化が息づき、主役を演ずるシテ方には五途があります。しかし、それ以上に美しい能楽の舞台の構成や作りはさまざま。能楽で何十年も学生を指導なさっている教員・学生達の先生方に話を聞いて、教えていただくことにしました。

舞台の構成です！ぜひご覧ください。

題材は「舟立」(巻物)「舟立」/主演は「能人」の「玉之助」。

ダイナミックな能楽の玉取りで新入生を魅了する。謡と仕舞、で観じます。

出演 | 龍世流 坂井 晋雅 (地味野正基、花山桂二) | 全生流 亀井 進一 (浦田 由美子、森川 尚文)

2022年6月11日(土) 14:00~16:00 可成 可成
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 3階演劇室

申し込み・問い合わせ | libsites.lib.keio.ac.jp/hys_events/kanon

主催 | 慶應義塾大学教養研究センター行事企画委員会 (HAPP)
共催 | 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP)
後援 | 慶應義塾大学アート・センター
協力 | 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎

慶應義塾大学 2022年度新入生歓迎行事

笠井 叡
ポストダンス公演

今、シヨパンを踊る

写真 | 大槻博樹

2022年10月19日(水) 16:30開演 開場30分前

慶應義塾大学 2022年度新入生歓迎行事
笠井 叡ポストダンス公演『今、シヨパンを踊る』
出演 | 笠井 叡
音響・照明 | 曾我 傑

主催 | 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事委員会 (HAPP)
慶應義塾大学アート・センター
協力 | 慶應義塾高等学校
コーディネーター | 小宮 草人

入場無料/慶應義塾・整生のみ50名限定 (要予約)
ご予約は下記、申込フォームよりお願いいたします。受付は先着順とし、定員になり次第締切させていただきます。

申し込みフォーム | <https://forms.gle/94T7GfLk3J5T8BA>

参加無料 (事前登録制)

国民文化のなかの
タイ舞踊

2023 1/17(火) 16時30分開場

17時~ 解説: タイ舞踊ってなに?
18時~ 実演と体験

会場 | 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎大会議室

タイ舞踊をご存知ですか? 東南アジアのタイでは、各地の民俗舞踊が、宮廷によって保護され、1932年の立憲革命以降も国民的文化として成長してきました。この企画では、タイ舞踊の歴史やジェンダー、国民文化との関係について、専門家とともに学びます。

当日は、舞踊家による実演があり、希望者は踊りを体験することもできます。なにも知らなくても大丈夫、途中参加も大歓迎です。ぜひ、ご参加ください。

講師 | 平田 眞子 (文化人類学者) : タイおよびラオスに長く滞在し、舞踊を始めとする芸術文化の調査に従事
実演 | チェンマイ大学ラーナー舞踊研究会O&OG

参加申込・お問い合わせ | <https://sites.google.com/keio.jp/thailandstudies>

コーディネーター | 伏見 岳志 (聴学部教授)
主催 | 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP)
共催 | 文部科学省科学研究費
「互の生成と感情に関する人類学的研究—芸術領域における知的財産法事例として」

慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP) 2022年度企画 / クラシック・ヨコハマ2022大学連携コンサート

室内楽・ピアノ
マラソンコンサート

2022. 11. 6 (日) 14時開演 (13時30分開場)

第1部 14:00開始 (ピアノ1)
第2部 15:45開始 (音楽アンソロジー)
第3部 17:45開始 (ピアノ2)

藤原洋記念ホール (慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)

入場無料・要事前申込 (詳細は日吉音楽学研究室ホームページ掲載)

問い合わせ | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室
045-566-1839 <http://musicology.keio.ac.jp/>
主催 | 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP)
クラシック・ヨコハマ実行委員会 | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室

Voie 2022 第一回 11月6日 (日)

音楽の交差点とコラボ

音楽の交差点とは、異なる文化・音楽の交差点を指し、音楽の交差点とコラボレーションを指します。

主催 | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室)

後援 | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室)

共催 | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室)

協力 | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室) | 慶應義塾大学日吉音楽学研究室 (日吉音楽学研究室)

2 日吉キャンパス公開講座

前身の「横浜市民大学講座」から数え 48 回目を迎えた 2022 年度「日吉キャンパス公開講座」を 9 月 24 日から 12 月 10 日の日程で開催した。2020 年度は感染症拡大により中止、2021 年度は定員を制限した中での開催となったが、2022 年度は、ほぼコロナ禍以前に近い形での開催となった。

2022 年度のテーマについては、4 月 5 日に実施した公開講座運営委員会において、委員長の提案を元に議論の結果「舞台裏のストーリー」に決定し、講師陣については委員長提示の素案を元に、委員からも提案があり、委員会として候補者リストを作成し、順次講演依頼を行った結果、後述のような陣容となった。

開催にあたり、テーマ概要として示した文章は以下の通りである（この部分のみ原文のままとするため、丁寧語で記すこととする）。

様々な事象は当事者から遠ざかれば遠ざかるほど、事実から遠ざかり、表面に見えている情報からその事象を判断すると、事実・真実とは大きくズレていることも少なくありません。全ての事実は暫定事実といえそうです。そもそも当事者ですら、時として事実をつかむのは時間もかかるし難しいものです。

客席から見えている舞台上の風景・ストーリーの裏で、それらを制作・演出するための舞台裏の戦いがあり、その中には、簡単な調査・検索では見つけられない情報が多数存在し、それらを知ることで、その事象の全体像により迫ることができ、時として全く違う見え方や理解に辿り着くこともあります。

台風で沢山のりんごが木から落ちてしまったという困った事象の裏で、それでも落ちなかった数少ないりんごは、そのストーリー性から「落ちないりんご」として受験グッズになりえます。数式も様々な変形が可能で、どのような形になっているかで、そこに至るまでのプロセス・ストーリーが異なります。研究の現場でも、全く異なるアプローチから同じ結論・結果が導かれれば、確度が高まり、裏をひとつ取れたことにもなるでしょう。相手に伝えたい事柄もその言い回しによって、思惑や伝わり方が異なります。

最近の地政学の話や、派生して、様々な分野の裏の世界を見ることで、表面的に得られる情報をより詳しく、時として、全く違う事実をつかめるよう

な事象を集め、皆様と共に考察を深められればと思います。

実施日・講演タイトル・演者は以下の通りである。

9 月 24 日

挨拶（奥田暁代：慶應義塾常任理事）

趣旨説明（寺沢和洋：日吉キャンパス公開講座運営委員長）

3 時限：ウクライナ戦争、世界経済、エネルギー政策の舞台裏

白井さゆり（慶應義塾大学総合政策学部教授）

4 時限：ウクライナ危機 ―ロシアの侵攻決定と苦戦の舞台裏―

廣瀬陽子（慶應義塾大学総合政策学部教授）

10 月 22 日

3 時限：TV ディレクター40年 私が出会った“偉人”達

室山哲也（日本科学技術ジャーナリスト会議会長）

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

【全5日】

2022年

9月24日(土)

12月10日(土)

舞台裏のストーリー

様々な事象は当事者から遠ざかれば遠ざかるほど、事実から遠ざかり、表面に見えている情報からその事象を判断すると、事実・真実とは大きくズレていることも少なくありません。全ての事実は暫定事実といえそうです。そもそも当事者ですら、時として事実をつかむのは時間もかかるし難しいものです。

客席から見えている舞台上の風景・ストーリーの裏で、それらを制作・演出するための舞台裏の戦いがあり、その中には、簡単な調査・検索では見つけられない情報が多数存在し、それらを知ることで、その事象の全体像により迫ることができ、時として全く違う見え方や理解に辿り着くこともあります。

台風で沢山のりんごが木から落ちてしまったという困った事象の裏で、それでも落ちなかった数少ないりんごは、そのストーリー性から「落ちないりんご」として受験グッズになりえます。数式も様々な変形が可能で、どのような形になっているかで、そこに至るまでのプロセス・ストーリーが異なります。研究の現場でも、全く異なるアプローチから同じ結論・結果が導かれれば、確度が高まり、裏をひとつ取れたことにもなるでしょう。相手に伝えたい事柄もその言い回しによって、思惑や伝わり方が異なります。

最近の地政学の話や、派生して、様々な分野の裏の世界を見ることで、表面的に得られる情報をより詳しく、時として、全く違う事実をつかめるよう

講演内容

講演内容	講師
挨拶 (12:35~12:40)	奥田暁代 慶應義塾常任理事
趣旨説明 (12:40~12:50)	寺沢和洋 日吉キャンパス公開講座運営委員長
① ウクライナ戦争、世界経済、エネルギー政策の舞台裏	白井さゆり 慶應義塾大学総合政策学部教授
② ウクライナ危機 ―ロシアの侵攻決定と苦戦の舞台裏―	廣瀬陽子 慶應義塾大学総合政策学部教授
③ TVディレクター40年 私が出会った“偉人”達	室山哲也 日本科学技術ジャーナリスト会議会長
④ シェイクスピアの舞台裏	小菅隼人 慶應義塾大学文学部教授
⑤ ユダヤ人の歴史は裏？	羽田 功 慶應義塾大学文学部教授
クラシックホールの舞台裏	原 浩之 慶應義塾大学音楽学部教授
⑥ ~健康産業の会社を持つ都内立一 の百貨ホールの成り立ち~	石井 明 慶應義塾大学経済学部教授
① ドイツサッカー強士の舞台裏	須田芳正 慶應義塾大学経済学部教授
② 路線図から見る、街の表と裏	中川寛子 慶應義塾大学文学部教授
① 生命現象を「見える」化する	國浩太郎 慶應義塾大学工学部教授
② 歴史の光と影	岩波敦子 慶應義塾大学文学部教授

募集要項 (要項もご覧ください)

募集対象 社会人はか
募集定員 500名 (先着順受付。定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。)

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス内

受付期間 2022年8月29日(月) 9時~9月9日(金) 17時まで

受講料 8,000円(全5日)

申込方法 教養研究センターホームページからお申し込みください。

申込受付 申し込み受付後、販売情報をお知らせします。受講料の振込みも合わせて、受講料決定となりますので、振込日までに受講料の振込みをお願いします。

特 典 期間中、日吉キャンパスをめぐります。《昼と夜の日吉》、《慶應義塾》、《全5日》、3日以上出席の方に贈る課外講座の授与および慶應義塾大学教養研究センター一冊 (書籍) 1冊を贈ります。

●受講上の注意
新型コロナウイルス感染症のまん延に伴う受講上の注意は掲載をご確認ください。

●個人情報の取扱い
●慶應義塾大学教養研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」受講にあたってお取寄せいただいた個人情報(「日吉キャンパス公開講座」を含むセンターからのお知らせのみに利用し、慶應義塾大学に提供される個人情報は必ずしも必要に応じて提供させていただきます。個人情報は、「慶應義塾個人情報保護方針」および「慶應義塾個人情報保護規程」に基づき取扱いします。

慶應義塾大学教養研究センター
URL: <https://lib-art.b.keio.ac.jp>

4 時限：シェイクスピアの舞台裏

小菅隼人（慶應義塾大学理工学部教授、日本演劇学会会長）

10月29日

3 時限：ユダヤ人の歴史は裏？表？

羽田 功（横浜商科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）

4 時限：クラシックホールの舞台裏 ～健康産業の会社が持つ都内唯一の音響ホールの成り立ち～

原 浩之（株式会社白寿生科学研究所 代表取締役社長）

11月26日

3 時限：ドイツサッカー強さの舞台裏

須田芳正（慶應義塾大学体育研究所教授）

4 時限：路線図から見る、街の表と裏

中川寛子（住まいと街の解説者）

12月10日

3 時限：生命現象を「見える」化する—生命研究の舞台表？舞台裏？—

岡浩太郎（慶應義塾大学理工学部教授）

4 時限：歴史像の光と影 —歴史の舞台裏を考える—

岩波敦子（慶應義塾大学理工学部教授）

4月の委員会開催の時点で、前年度よりは開催時期の感染症の状況が改善されていると見込まれつつも、場合によっては中止も検討される中、前年度に引き続き、以下の対策を行った。

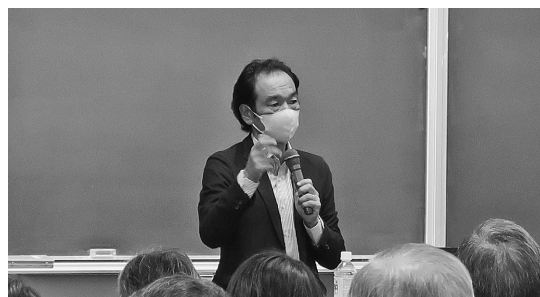
- ・感染症予防対策として、大教室を使用し、座席の左右どちらかは空席にするようにして、受講生が密にならないようにした。
- ・受講申し込みをこれまでの郵送・FAXを廃止し、web経由のみとし、定員減に伴う減収を経費削減（チラシ等の枚数削減など）によりある程度カバーした。

前年度と同様に、コロナ禍ということで、受講申し込みが低調になることも想定されたが、募集開始から一週間程で定員（350名）を上回る申し込みをいただき、盛況となった。受講者アンケートとしても、アンケート提出者のうち88%の受講者から「満足」との回答を得ることができ、無事に講演期間を完了することができた。今後も、アンケートの意見を参考に改善していける点は積極的に改善し、魅力のある統一テーマの創造、文系・理系・体育系等、様々な分野の教員が多数在籍する日吉キャンパス・義塾の特徴を活かし、日常的で身近な話題から最先端の研究開発の話題まで、分野網羅的な講座を今後も展開していきたいと考えている。

（寺沢和洋）



小菅 隼人 氏



須田 芳正 氏



岡 浩太郎 氏



岩波 敦子 氏

3「創造力とコミュニティ」 研究会

「創造力とコミュニティ」研究会は、大学で培われる学問や実学の知見をより広い地域社会に広げていく可能性について、実際に活動を開始している人々の話を聞き、議論を通して新たなコミュニティ形成の可能性を考察する場として2018年5月に活動を開始した。2022年度は、「ポストパンデミックの社会的包摂」をテーマとして、新たなコミュニティの創設や、他者理解を進めている人々をお招きして研究会を開催し、学生と教職員を交えたディスカッションの場を設けた。本年度は以下の6回の研究会を開催した。

2022年7月12日

第14回「伝統文化の舞台から世界を考える」

講師：花崎杜季女氏

2022年8月23日

第15回「土に触れ、空気に触れ、人と繋がる」

講師：原田朋子氏

2022年11月15日

第16回「命をいただくということ～そして私は
猟師になった～」

講師：保苺優雅氏

2022年12月20日

第17回「私の怒りと向き合う～認め、対峙し、

表現する～」

講師：手塚千鶴子氏

2023年2月14日

第18回「作り手と受け手をつなぐ『テーブル』」

講師：任意団体「虹色畑クラブ」参加者と参加者のサポーター

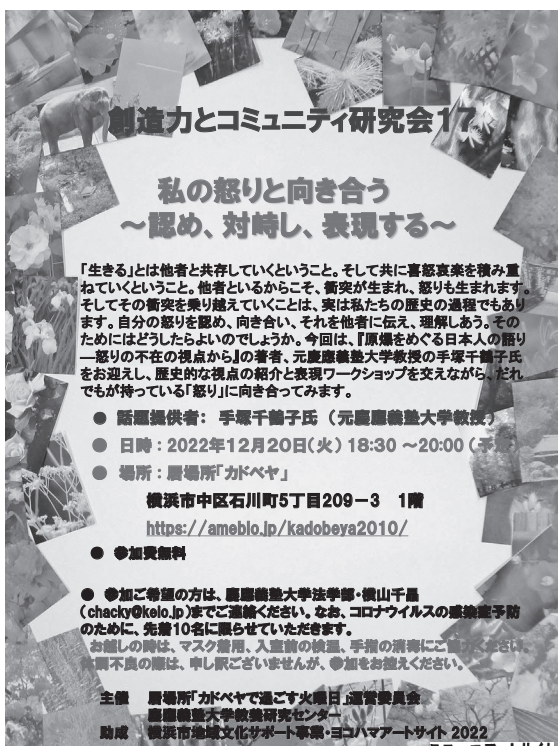
2023年3月14日

第19回「祈りの場をひらく」

講師：小菅隼人氏

この2年間の COVID-19 の感染症流行のために、私たちの社会とコミュニティの在り方・捉え方は大きく変わった。

このような状況の下で研究会は、2020年度は「パンデミックの中でのコミュニティとアート」をテーマとして、宗教、文化政策、カウンセリング、そして公共アートの現場に関わる人々を招いて話を聞き、ディスカッションを行った。続く2021年度はその後のアーティストたちの活動を追いつつ、新たに伝統芸能に携わる方々を招いて、パンデミックにおける国家の文化政策とその欠点、そしてアーティストたちの自助努力について話を聞くことができた。この2年間の積み上げをもとにした今回の6回の研究会の内容は以下のようにまとめることがで





きる。

1) ウクライナにおける戦争と日本の芸術

2022年はウクライナにおけるロシアの侵攻という新たな脅威が加わった。第14回目の研究会では、ウクライナ近隣のポーランド、リトアニアにおいて現地の古くからの物語をもとに日本舞踊を作り上げたアーティストのお話を伺い、芸術の世界からみたウクライナ情勢について語っていただいた。

2) 目に見える消費と新たなコミュニティの創設

パンデミックを経て、作り手と使い手の距離がますます開く中で、その分断をつなぐ試みは地元の中で起こりつつある。「目に見える」消費の在り方は、ポストパンデミックの新たなコミュニティの創設にもつながるであろう。第15回の「土に触れ、空気に触れ、人と繋がる」の研究会では、日吉近郊で有機栽培による畑の活動を生きにくさを感じている若者とそのサポーターたちとともに行い、そこでの安全な食材を子供食堂などに届けている団体のお話を伺った。また第16回では、ひきこもりだった青年が、伊豆にわたり、そこで、猟師の資格を取り、高齢化が進む伊豆のコミュニティづくりに大きくかかわっている様子を本人に語っていただいた。そして第18回では第15回で紹介した畑の活動で出来上がった食材を使って新たなコミュニティづくりに生か

しているカドベヤの例を、目に見える消費と新たなコミュニティづくりの例として食材の作り手の方々の話し合いのもとで紹介した。

3) 他者とのつながり

第17回では『原爆をめぐる日本人の語り：怒りの不在の視点から』の著者、手塚千鶴子氏を招いて、自分の内面を見つめたうえで、正しい自己表現のもとに他者とつながることの重要性について、参加者とともに語り合った。また第19回目では、COVID-19との共存の道を歩み始めた今、今ひとたびこの3年間の分断の期間を振り返った。今回は教会の門戸が閉ざされたときに、自宅を祈りの場として開いた小菅隼人氏をお招きして、他者とのつながりについて考察した。

本年度の特徴は、非常に多くの学生たちが研究会に出席したことである。パンデミックとの共存が進む時代は、新たなコミュニティを作る可能性と、未来への不安が同居している。若者たちはその不安と期待の中で生きていることを議論の端々にも感じることができた。今後は本年度の研究会での知見や議論を大学の授業で生かしていくと同時に、2023年度の研究会では、学生たちが主体となる研究会を開催したいと考えている。

(横山千晶)

1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年 6月 3日 平成18年 5月 9日
 平成20年 5月 1日 平成20年11月 4日
 平成21年12月15日 平成23年 3月29日
 平成26年12月 5日 2020年 6月 2日

(設置)

第1条 慶應義塾大学（以下、「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下、「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進およびこれに関する教育活動を行うことで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 前号の事業に関する授業科目の設置と教育活動
- 3 教養研究および教育活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 4 教養研究および教育活動への助成および支援
- 5 教養研究および教育活動状況の把握と情報の収集および発信
- 6 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼

任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 ITC 所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネ

ネット・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託することができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究

または共同研究

3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則(2020年6月2日)

この規程は、2020年7月1日から施行する。

2 運営委員会委員

2022年4月1日～2023年3月31日在籍者
第11期（2021年10月1日～2023年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

奥田 暁代

教養研究センター所長

小菅 隼人（2022年9月30日まで）

片山 杜秀（2022年10月1日から）

教養研究センター副所長

片山 杜秀

高橋 宣也

山下 一夫

寺沢 和洋

教養研究センター事務長

大古殿憲治

文学部長 倉田 敬子

経済学部長 駒形 哲哉

法学部長 堤林 剣

商学部長 岡本 大輔

医学部長 金井 隆典

理工学部長 村上 俊之

総合政策学部長

加茂 具樹

環境情報学部長

一ノ瀬友博

看護医療学部長

武田 祐子

薬学部長 三澤日出巳

文学部日吉主任

市川 崇

経済学部日吉主任

柏崎千佳子

法学部日吉主任

大久保教宏

商学部日吉主任

福澤 利彦

医学部日吉主任

南 就将

理工学部日吉主任

井上 京子

薬学部日吉主任

大澤 匡範

体育研究所所長

石手 靖

日吉メディアセンター所長

横山 千晶

日吉ITC所長

安田 淳

外国語教育研究センター所長

七字 眞明

自然科学研究教育センター所長

井奥 洪二

日吉研究室運営委員会委員長

高桑 和巳

日吉キャンパス事務長

國分 紀嗣

日吉学生部事務長

寺島 博之

日吉メディアセンター事務長

長島 敏樹

日吉キャンパス事務センター課長

川田 孝征

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋

3 組織構成員

2022年4月1日～2023年3月31日

所員：184名（2023年3月31日現在）

所長：小菅隼人（理・2022年9月30日まで）

片山杜秀（法・2022年10月1日から）

副所長：片山杜秀（法）

高橋宣也（文）

山下一夫（理）

寺沢和洋（医）

コーディネーター：

柏崎千佳子（経）、新島進（経）、石川学（商）、

種村和史（商）、西尾宇広（文）、鈴木亮子（経）、

高山緑（理）、不破有理（経）、徳永聡子（文）、

高田眞吾（理）、神武直彦（SDM研究科）、

石井明（経）、

國分紀嗣（日吉キャンパス事務長）、

大古殿憲治（教養セ事務長）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井明（経）

委員：高橋宣也（文）、津田眞弓（経）、大出敦（法）、

竹内美佳子（商）、小菅隼人（理）、小林拓也（理）

石手靖（体研）、澁谷麻由美（保セ）、

國分紀嗣（日吉キャンパス事務長）、

川田孝征（運営サ）、周藤有実（運営サ）、

友田明文（学生部・2022年12月31日まで）、

五十嵐暁俊（学生部・2022年5月31日まで）、

中尾悠乃（学生部・2022年6月1日から）、

長島敏樹（日吉メディアセ）、

今井星香（日吉メディアセ）、

鈴木都美子（教養セ・2022年5月31日まで）、

田邊まどか（教養セ・2022年6月1日から）

（株）白寿生科学研究所寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理・2022年9月30日まで）

片山杜秀（法・2022年10月1日から）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、山下一夫（理）、

寺沢和洋（医）、石井明（経）

（株）コーエーテクモホールディングス寄附講座

「日吉学」運営委員会

委員長：小菅隼人（理・2022年9月30日まで）

片山杜秀（法・2022年10月1日から）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

山下一夫（理）、寺沢和洋（医）、

大出敦（法）

「日吉学」企画委員会

委員長：大出敦（法）

委員：小菅隼人（理・2022年9月30日まで）

片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

安藤広道（文）、有川智己（経）、長田進（経）、

福山欣司（経）、不破有理（経）、

神武直彦（SDM研究科）、

阿久澤武史（塾高）、杵島正洋（塾高）、

都倉武之（福澤研究セ）、太田弘（元普通部）

（株）コーエーテクモホールディングス寄附講座

「ゲーム学」運営委員会

委員長：小菅隼人（理・2022年9月30日まで）

片山杜秀（法・2022年10月1日から）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、山下一夫（理）、

寺沢和洋（医）、新島進（経）

「ゲーム学」企画委員会

委員長：新島進（経）

委員：山下一夫（理）、寺沢和洋（医）

「エンターテインメントビジネス論」企画委員会

（2022年10月1日から）

委員長：山下一夫（理）

委員：三原龍太郎（経）、吉川龍生（経）

「生命の教養学」企画委員会

委員長：西尾宇広（文・2022年9月30日まで）

石川学（商・2022年10月1日から）

委員：石川学（商・2022年9月30日まで）、

川添美央子（商・2022年9月30日まで）、

坂内健一（理・2022年9月30日まで）、

清水史郎（理・2022年9月30日まで）、

西尾宇広（文・2022年10月1日から）

川上了史（理・2022年10月1日から）、

谷口尚子（SDM研究科・2022年10月1日から）

有川智己（経）、宮本万里（商）、山下一夫（理）、

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：高橋宣也（文）、有川智己（経）、石井明（経）、

川添美央子(商)、小菅隼人(理)、沼尾 恵(理)
神武直彦 (SDM 研究科)、野口和行 (体研)、
國分紀嗣 (キャンパス事務長)

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子 (経・2022年11月30日まで)

小菅隼人 (理・2022年12月1日から)

委員：小菅隼人 (理・2022年11月30日まで)、
ミヤン・マルティン、アルベルト(経・2022年11月30日まで)、
鈴木亮子 (経・2022年12月1日から)、
片山杜秀 (法・2022年12月1日から)、
山下一夫 (理・2022年12月1日から)、
鳥海奈都子 (塾高)

教養研究センター事務局

大古殿憲治 (事務長)

鈴木都美子 (2022年5月31日まで)、

田邊まどか (2022年6月1日から)、

池本晶子、富田いづみ、鈴木知子

4 2022年度の主な活動記録

Date	Events
4	<p>1日～14日 18日～7月15日 20日 20日</p> <p>教養研究センター設置科目ガイダンス（オンデマンド配信・keio.jp 認証） 「学び場」プロジェクト 情報の教養学 「メタバース（仮想世界）のルールと権利講座」福井健策 読書会 晴読雨読「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹①」 デイル・ジョナサン 第1回所長・副所長会議 第1回コーディネート・オフィス会議 25日 26日 27日 29日</p> <p>情報の教養学 「情報に踊らされず、世界を平和に導く！」伊藤公平 基盤研究 文理連接プロジェクト第1回 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(1) 荒金直人、井奥洪二、見上公一、宮本万里</p>
5	<p>9日 10日、17日、24日、 6月7日、14日、 21日、28日 16日 20日、25日 27日 31日</p> <p>第1回運営委員会 実験授業 「エンターテインメントビジネス論」 ニュースレター 40号刊行 HAPP企画「ライブラリーコンサート2022」 基盤研究 文理連接プロジェクト第2回 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(2) 縣由衣子、小菅隼人、高山緑、寺沢和洋 第2回所長・副所長会議 読書会 晴読雨読「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹②」 デイル・ジョナサン</p>
6	<p>8日 11日 13日 18日 20日 28日 29日</p> <p>HAPP企画「新入生歓迎行事 ワークショップレクチャー『コロナを超えて』 コロナ時代のメイクアップ」 HAPP企画「能の流儀一謡と仕舞一」 第2回コーディネート・オフィス会議 学会・ワークショップ等開催支援「国際シンポジウム 濱口竜介監督『ドライブ・マイ・カー』をめぐって」 情報の教養学「サイバースペースゲーム：デジタル技術が変える国際政治」土屋大洋 第3回所長・副所長会議 第三十四弾 研究の現場から「第二次世界大戦前・中・後のBBC ラジオ放送ーリスナーの参加の観点から」永嶋友</p>
7	<p>1日 5日 12日 13日 25日 29日</p> <p>基盤研究 文理連接プロジェクト第3回 「エコロジー」をどのように論じることができるのか(3) 荒金直人 読書会 晴読雨読「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹③」 デイル・ジョナサン 創造力とコミュニティ研究会14「伝統文化の舞台から世界を考える」 基盤研究 教養研究講演会 no.6 「西洋文明の源流としての旧約聖書ー生きるための知恵を学ぶー」小友 聡 第4回所長・副所長会議 基盤研究 文理連接プロジェクト第4回 エコロジー論の中間発表(1) 荒金直人、見上公一、宮本万里</p>
8	<p>1日 23日 30日～9月2日</p> <p>第3回コーディネート・オフィス会議 創造力とコミュニティ研究会15「土に触れ、空気に触れ、人と繋がる」 庄内セミナー</p>
9	<p>6日 24日、10月22日、 29日、11月26日、 12月10日 28日 30日</p> <p>第2回運営委員会 日吉キャンパス公開講座 第5回所長・副所長会議 基盤研究 文理連接プロジェクト第5回 エコロジー論の中間発表(2) 縣由衣子、井奥洪二、小菅隼人、高山緑、寺沢和洋</p>

10	10月1日 3日、17日、24日、 31日、11月7日、 14日、28日 17日～ 2023年1月20日 19日 21日 24日 26日 28日 29日	<p>教養研究センターパンフレット刊行 実験授業 スポーツ・インテグリティ</p> <p>「学び場」プロジェクト</p> <p>HAPP企画 新入生歓迎行事/笠井叡ポスト舞踏公演『今、ショパンを踊る』 HAPP企画 新入生歓迎行事/教養の一貫教育 Vol.5「Voix / Voie 吉増剛造×大友良英 詩と音楽の交差するところ2」</p> <p>第6回所長・副所長会議 情報の教養学「考える葦とAIとの共進化」栗原聡 基盤研究 文理接続プロジェクト第6回 「自然」という概念について 荒金直人、井奥洪二 学会・ワークショップ等開催支援 「横浜 [出前] 美術館」学芸員によるレクチャー 「ミュージアム・コレクションの未来」</p>
11	1日 6日、26日 14日 15日 15日 16日 16日 25日 30日	<p>読書会 晴読雨読「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹④」 デイル・ジョナサン</p> <p>HAPP企画 日吉音楽祭 2022 第4回コーディネート・オフィス会議 第3回運営委員会 創造力とコミュニティ研究会 16「命をいただくということ～そして私は猟師になった ～」</p> <p>情報の教養学「時代と知性を考える」安宅和人 基盤研究 教養研究講演会 no.7 「キリスト教は『世界』をどう取り戻すかー救済宗教の akosmismを超えて」近藤勝彦 基盤研究 文理接続プロジェクト第7回 エコロジー論の中間発表(3) 「心理学における『エコロジー』、超高齢社会における『エコロジー』」高山緑 「エコロジーと近代性 フェリールとラトゥールの見解の違いを手掛かりに」荒金直人 ニューズレター 41号刊行、第11回「庄内セミナー」報告書刊行</p>
12	7日 12日 14日 17日 20日	<p>情報の教養学「デイリーセンシングで賢く自分らしく生きる～生体信号を用いた感情認 識から病気の予兆検出まで～」満倉靖恵</p> <p>第7回所長・副所長会議 第三十五弾 研究の現場から 「オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』と革 命の世界文学：ヨーロッパ・ソ連・中国」越野 剛 慶應義塾大学エンターテインメント三講座合同シンポジウム エンタメ学宣言！～ゲー ム・音楽・アニメから展望する研究・教育の現在と未来～ 創造力とコミュニティ研究会 17「私の怒りと向き合う～認め、対峙し、表現する」</p>
1	6日 17日 17日 23日	<p>基盤研究 文理接続プロジェクト第8回 「宇宙環境と生活圏のエコロジー ～宇宙放射線被曝を中心に～」寺沢和洋 「アータン、ボブジカ谷の自然保護政策と人・神・獣関係の変容」宮本万里 読書会 晴読雨読「アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹⑤」 デイル・ジョナサン</p> <p>HAPP企画 国民文化のなかのタイ舞踊一講演、実演、体験ー 第8回所長・副所長会議</p>
2	3日 8日 9日 14日 27日	<p>基盤研究 文理接続プロジェクト第9回 「ミシェル・セール『自然契約』における自然概念とエコロジー」縣由衣子 「対立する双子？：気候工学と環境人文学」見上公一 不破有理教授 最終講義 「アーサー王伝説に魅せられて～研究と教育と～」 アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション 創造力とコミュニティ研究会 18「作り手と受け手をつなぐ『テーブル』」 第5回コーディネート・オフィス会議</p>
3	7日 13日 14日 29日	<p>第4回運営委員会 基盤研究 文理接続プロジェクト第10回 「〈自然〉の中の人間、人間の中の〈自然〉：『リア王』の空間意識一試論」小菅隼人 「宇宙環境と生活圏のエコロジー ～宇宙放射線被曝を中心に～」寺沢和洋 創造力とコミュニティ研究会 19「祈りの場をひらく」 第9回所長・副所長会議</p>

慶應義塾大学教養研究センター
2022年度 活動報告書

2023年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 片山杜秀

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-566-1151

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

印刷・製本 サンパートナーズ(株)

Keio University



慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts